

京都市内遺跡試掘調査報告

平成19年度

2008年3月

京都市文化市民局



写真1 山科本願寺跡 土塁現状（平成17年6月撮影・北東から）



写真2 山科本願寺跡 濠北斜検出状況（南東から）

ご あ い さ つ

今から1200年以上前の桓武天皇の治世に「この国、山河襟帯にして自然に城をなす」といわれ、三方をたおやかな峰々に囲まれた京都盆地の中央に、新しい国の首都が遷都され「平安京」と号されました。京都では、それ以後、わが国の政治・文化・経済・宗教などの中心舞台として様々な歴史が展開されてきました。また、市域内の周辺部においては、遷都以前の旧石器時代を含む、縄文時代、弥生時代、古墳時代などの遺跡も数多く、京都盆地が早くから拓かれ、多くの人々が脈々と生活を営んできたことを物語っております。これら古代から近世まで時代ごとに積み重なった埋蔵文化財包蔵地（遺跡）が、市内では約800件に及び、それらは、わが国の歴史や文化を直接我々に教えてくれる国民共有の財産であります。本市では、先人が残した貴重な埋蔵文化財を後世に伝える責務を果たすべく、「保存」と「開発」の調和を図りながら、埋蔵文化財の保存と保護に取り組んでおります。

この度、平成19年度に本市が文化庁の国庫補助を得て実施した埋蔵文化財調査成果をまとめた報告書を作成致しました。この報告書が京都の歴史と文化財への理解を深めるために、広く御活用いただければ幸いに存じます。

結びに、各調査の実施に当たり、御理解、御協力を賜りました市民の皆様と、御指導を賜りました関係機関の皆様深く御礼申し上げます。

平成20年 3月

京都市文化市民局長 山岸 吉和

例 言

- 1 本書は、京都市が文化庁の国庫補助を得て実施した平成 19 年度の京都市内遺跡試掘調査報告書である。平成 19 年 1 月から 12 月まで実施した試掘調査のうち、重要な成果のあったものについて本文で報告している。ただし、試掘調査の結果、発掘調査を指導したものについては、発掘調査報告書の刊行を待つこととし、一覧表にのみ掲載している。
- 2 試掘調査を実施した総ての地区・所在地・調査日・調査概要については、試掘調査一覧表に掲載（49～54 頁）している。なお、各章表題末尾の番号と調査一覧表の番号並びに図版の番号は対応している。
- 3 本文の執筆分担は、本文の末尾に記している。
- 4 本書に使用した地図は、本市の都市計画局発行の都市計画基本図（縮尺 1/2,500）を複製して調整したものを掲載している。なお図版に使用した地図の縮尺は以下のとおりである。
図版 1～13 1/8,000 図版 14～20 1/10,000
- 5 本書に使用した土壌色名は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版標準土色帳』に準じた。
- 6 遺物整理にあたっては、岩本淳子・岡本沙千代・金子 央・上茶谷美保の協力を得た。
- 7 調査及び本書作成は京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課が担当し、(財)京都市埋蔵文化財研究所の協力を得た。

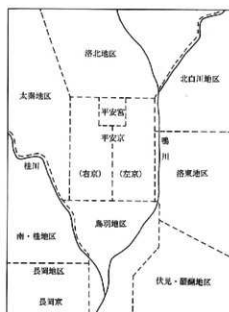


図 1 調査地区地図

目次

	頁
I 試掘調査の概要	1
II 平安京左京	3
1 三条三坊十町跡・烏丸御池遺跡・二条殿御池城跡 (中京区両替町通御池上る龍池町 449-1)	3
2 四条四坊九町跡 (中京区柳馬場通三条下る槌屋町 84-2)	7
III 平安京右京	10
1 九条大路跡・唐橋遺跡 (南区唐橋川久保町 18)	10
IV その他市内遺跡	14
1 本山古墳群 (左京区岩倉幡枝町 333-3 他)	14
2 御所ノ内町遺跡 (右京区太秦御所ノ内町 22, 25-1)	17
3 史跡天塚古墳 (右京区太秦松本町)	21
4 山科本願寺跡 (山科区西野広見町 5-7, 5-10)	25
5 烏羽離宮跡・烏羽遺跡 (伏見区中島秋ノ山町 100-1)	28
6 下烏羽遺跡 (伏見区竹田松林町 58, 59)	31
7 下三栖城跡 (伏見区横大路下三栖辻堂町 56 の一部, 60 の一部)	34
8 福西古墳群 (西京区大枝東長町 1-214)	38
9 中久世遺跡 (南区久世中久世町 4 丁目 33)	46
V 試掘調査一覧表	49
報告書抄録	55

図 版 目 次

- 図版 1 平安宮跡
- 図版 2 左京 北辺・一・二・三条 一・二坊
- 図版 3 左京 北辺・一・二・三条 三・四坊
- 図版 4 左京 四・五・六条 一・二坊
- 図版 5 左京 四・五・六条 三・四坊
- 図版 6 左京 七・八・九条 一・二坊
- 図版 7 左京 七・八・九条 三・四坊
- 図版 8 右京 北辺・一・二・三条 三・四坊
- 図版 9 右京 北辺・一・二・三条 一・二坊
- 図版 10 右京 四・五・六条 三・四坊
- 図版 11 右京 四・五・六条 一・二坊
- 図版 12 右京 七・八・九条 三・四坊
- 図版 13 右京 七・八・九条 一・二坊
- 図版 14 史跡名勝嵐山・御所ノ内町遺跡・仁和寺院家跡・本山古墳群・妙満寺窯跡・船山須恵器窯跡・修学院遺跡
- 図版 15 植物園北遺跡・上京遺跡・吉田神社境内・吉田山遺跡・六勝寺跡（法勝寺跡）・岡崎遺跡
- 図版 16 珍皇寺旧境内・方広寺跡・六波羅政庁跡・法住寺殿跡・中臣遺跡・山科本願寺跡・山科本願寺南殿跡・醍醐古墳群
- 図版 17 伏見城跡・深草坊町遺跡・安楽行院跡・桂徳大寺町遺跡・史跡名勝嵐山・嵐山谷ヶ辻子町遺跡・福西古墳群
- 図版 18 中久世遺跡・大藪遺跡・下久世構跡・下久世城跡・石原城跡・下三柄城跡・長岡京跡
- 図版 19 長岡京跡
- 図版 20 上烏羽遺跡・烏羽離宮跡・烏羽遺跡・下烏羽遺跡

表 目 次

- 表 1 年次別試掘調査実施件数表…………… 1
- 表 2 福西古墳群古墳番号対応表…………… 40
- 表 3 試掘調査一覧表…………… 49～54
- 表 4 遺物概要表…………… 54

I 試掘調査の概要

1 京都市内の埋蔵文化財行政

京都市で所管する周知の埋蔵文化財包蔵地（以下、遺跡という。）は、京北町との合併、今春の遺跡地区図定を経て784件を数えるに至っている。その範囲内で行われる土木工事については、遺跡の重要度と工事規模に応じて「慎重工事」・「立会調査」・「試掘調査」・「発掘調査」の4種の行政指導を行っている。その業務については、当初は文化財保護課が、昭和55年の京都市埋蔵文化財調査センター設立以後はセンターが担当してきたが、平成18年4月1日付けで文化財保護課と統合され、新たに文化財保護課として埋蔵文化財行政を担当することになった。

4種の行政指導に基づいて実施される調査には、国庫補助による調査と原因者負担による調査があるが、立会調査・試掘調査については、そのほとんどを国庫補助事業として実施している。国庫補助事業による立会調査と発掘調査は(財)京都市埋蔵文化財研究所(以下、「埋文研」という。)へ委託し、その成果は、毎年、別冊の報告書により報告されている。

本報告書は、平成19年1月～12月に文化財保護課が実施した、国庫補助による試掘調査を取りまとめたものである。文化財保護課で実施する試掘調査は、届出や通知を受けた工事予定地内における遺跡の有無、あるいは遺跡の残存状況やその範囲を把握し、遺跡が良好に存在し、工事がその遺跡を破壊する場合には発掘調査を指導し、設計変更などにより遺跡の保存が可能であれば開発者に対して遺跡保護の措置を指示するなど、文化財保護行政上重要な業務であり、現在4名の技師がこの調査に従事している。

平成19年1月～12月に文化財保護法に基づいて提出された届出（文化財保護法第93条）・通知（同法第94条）件数は、総数で1,036件になる。これは前年比で119件減（10.3%減）

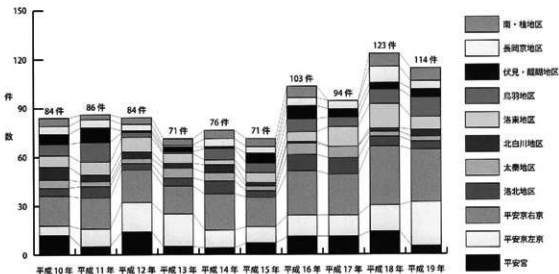


表1 年次別試掘調査実施件数表

とはなっているものの、前年の数字が、平成19年6月の建築基準法改正や、同年9月の市景観条例の改正を控えた駆け込み工事を含んでいることを勘案すれば、平成16年以降の高い水準はなおも継続していると言える。これらの届出・通知に対して、文化財保護課は立会調査492件（前年607件、18.9%減）、試掘調査109件（同119件、8.4%減）、発掘調査14件（同11件、27.3%増）、慎重工事416件（同388件、7.2%増）の指導を行った。

このような指導に基づき、文化財保護課が実施した試掘調査も、114件と引き続き多い。グラフで見ると、平安京左京域での調査が昨年からさらに増加して、過去10年で最高になっているが、四条三・四坊に集中していた昨年とは異なり、左京全域で調査を行っているのが今年の特徴である。また、大規模小売店の出店に牽引されて平安京右京六条三・四坊周辺の調査が多い傾向も、引き続き維持されているように見える。調査原因については、社会の問題意識を反映して、調査原因に汚染土壌の改良工事が目立つようになってきている。

2 平成19年の試掘調査概要

文化財保護課及び埋文研では、旧京北町域を加えた京都市域を12のエリアに区分している（図1）。平成19年の試掘調査の地区別件数は、平安宮地区5件、平安京左京地区27件、平安京右京地区32件、洛北地区5件、太秦地区3件、北白川地区4件、洛東地区8件、烏羽地区12件、伏見・醍醐地区5件、長岡京地区5件、南・桂地区8件、京北地区0件である。このうち24件（V章・試掘調査一覧表参照）については発掘調査を指示し、埋文研が10件（No.2・3・27・46・77・78・84・85・94・105）、関西文化財調査会（代表 吉川義彦）が3件（No.9・40・54）、古代文化調査会（代表 家崎孝治）が2件（No.6・41）、（株）イビソク（代表取締役 森 重幸）が1件（No.1）の調査を年内に実施した。

発掘の実施による成果のうち顕著なものを挙げれば、平安京左京北辺三坊三町跡では、桃山時代の金箔瓦が井戸跡に投棄された状態で大量に出土し（No.1）、右京一条二坊四町跡では、従来下層遺構の知られていなかったエリアで、弥生後期の竪穴住居1棟を検出した（No.9）。本能寺城跡では、石積みで護岸された濠から「能」字文の軒丸瓦が出土し、本能寺の変当時の確実な遺構を初めて確認する成果を挙げた（No.40）。植物園北遺跡では、平安前期の掘立柱建物が2棟並ぶのを確認し、緑軸陶器や白色土器の出土率が高いことから、特殊な性格の遺構と考えられた（No.78）。伏見城跡では武家屋敷に伴うと思われる石組溝や門跡を検出した（No.105）。

更に、工事の掘削深度が試掘で確認した遺構面より十分に浅いため、又は設計変更で遺構面より浅くして当面の保存が図られたため、発掘調査に至らなかった例が12件あり、No.36・88・89・96・100・106・113については、本書本文中で報告する。

更に、遺構保存はできなかったが見るべき成果のあった試掘として、平安京左京四条四坊九町跡（No.42）と右京九条大路跡（No.14）を報告するほか、原因者と協議中の本山古墳群（No.17）、良好な表採資料の得られた天塚古墳、混乱の見られる名称を再整理した福西古墳群について、報告を掲載する。

（堀 大輔）

II-1 平安京左京三条三坊十町跡・ 烏丸御池遺跡・二条殿御池城跡 No.36

1 はじめに

調査地は、御池通と両替町通の交差点を北に少し入った西側、中京区龍池町449-1である。

押小路殿は鎌倉時代、後鳥羽上皇の御所であったところで、承久の乱以後は藤原氏二条家の本邸、二条殿として室町後期まで伝承された。その園池は龍躍池と呼ばれた名庭で、今の町名の由来ともなっている。天正5年(1577)には、織田信長が二条家を立ち退かせて自身の邸宅とし、本能寺の変当夜、西隣の妙覚寺を宿所としていた長男信忠は、防禦に優れた当邸に移って明智方に抗戦の後、自刃したという。

北隣の京都労働基準局では、庁舎建て替えに伴う平成13年度の発掘調査で、押小路殿・二条殿の園池と見られる遺構が検出されており¹⁾、当時世間の耳目を集めた。

今回当該地で届け出られた計画の建物規模は、試掘の対象基準を大きく下回るものであったが、園池遺構が当該地にも広がるのが予想されたため、事業主側と協議した結果、基礎掘削深度GL-1.5mの範囲内で遺構の記録保存をするべく、調査を実施することとなった。調査は平成19年4月11・12日の2日間で、調査面積は32㎡であった。

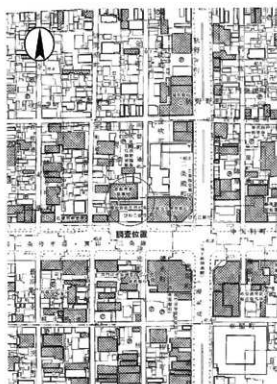


図2 調査位置図(1:5,000)

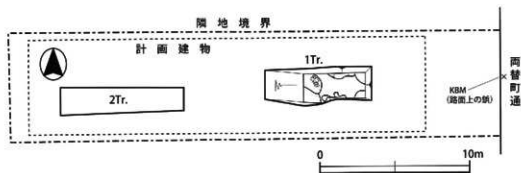


図3 トレンチ位置図(1:250)

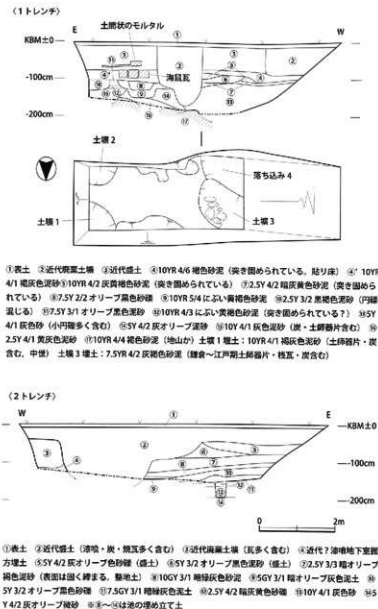


図4 1Tr. 平・断面図及び2Tr. 断面図 (1:100)

面で建物が建てられる時期、その僅か上でモルタルの土間が設けられる時期の、少なくとも4時期の遺構が確認できる。④層上面で成立する建物は、海鼠瓦を地表に木口が見えるように一列に埋め並べて区画線とし、長径40cmほどの大振りな礎石を据えたものであるが、トレンチの幅が2m 足らずということもあって、確認できた礎石は1石のみである。モルタル土間の直下であることからすれば、幕末～近代のものであろうか。

2Tr. 計画建物の西半に設定した。トレンチ西半では近代の漆喰壁の地下室や、それを切っで成立する廃棄土層が重なり合っているのに対し、東半は、地表近くまで重なる砂・砂礫・泥土の互層である。これらは、おそらく数時期にわたる造成の結果であろうが、少なくともその下半は、1Tr.の⑬層に対応するものと考えられる。その年代については、2Tr.⑬層から棧瓦が出土しており、近世を遡り得ない。

2 層序と遺構

現地が狭隘であったため、一度に広い面積を掘ることは不可能で、反転方式で2箇所のトレンチを掘削した。

1Tr. 計画建物の東半に設定した。トレンチ東端ではGL-1.5mで地山と思われる褐色砂泥層(⑬層)に達する。この地山面は西に向かって緩やかに下がり、トレンチ東端から3.3m 附近で急に角度を増して落ち込んでいく。この落ち込みは、北隣の調査成果から見て、押小路殿・二条殿の園池の東にある大きな段差に相当すると思われる。

この段差は、無遺物の砂(⑬層)によって埋め立てられており、その上面で⑬層を埋土とする土層が成立する時期があった後、⑦・⑪層上面で⑯や⑰・⑱層を埋土とする土層が成立する時期、④層上

許容された GL-1.5m の掘削範囲内では、地山面は全く確認されず、1 Tr. で確認した落ち込みの中に入ってしまったものと思われる。

3 まとめ

今回の調査は、上記の通り GL-1.5m までという条件付きで行ったものであるが、1 Tr. 東端で、ちょうど GL-1.5m が地山面であったほかは、落ち込みを近世以降に埋め立てて成立した遺構のみであることを確認できた。この段差は、北隣の発掘調査により、遅くとも鎌倉時代前期には存在しており、池底との間に 2m 近い高低差があって、立体的な景観を形成していたことがことが明らかになっている。この段差は埋め立てによって徐々に緩やかになってはいくが、最終的に解消されるのは近代以降と理解されており、今回の調査所見はこれに矛盾しない。

今回の成果により、平成 13 年調査区で確認された園池遺構が予想通り南に広がることが確かめられた。遺構平面図を合成すると、段差のラインは南で東へ広がっていくことも分かった。一方、本調査と同時期、平成 13 年調査区の北隣でも、共同住宅建築に伴う発掘調査が実施されたが、その調査区では段差や洲浜などの遺構が全く認められておらず、段差のラインはここで大きく西へ回り込むものと考えられる(図 5)。二条殿の変化に富んだ庭園景観を彷彿とさせる所見である。今回の調査区においても、近現代の攪乱は GL-1.5m 以下にほとんど達しておらず、確認した面の下層に、北隣で検出されたのと同様な、洲浜を伴う庭園遺構が良好に遺存している可能性が高い。事業主側とは将来の再調査の必要性を確認し、今回の調査を終えた次第である。

(堀 大輔)



写真3 1Tr. 上層礎石検出状況 (北東から)



写真4 1Tr. 遺構検出状況 (西から)

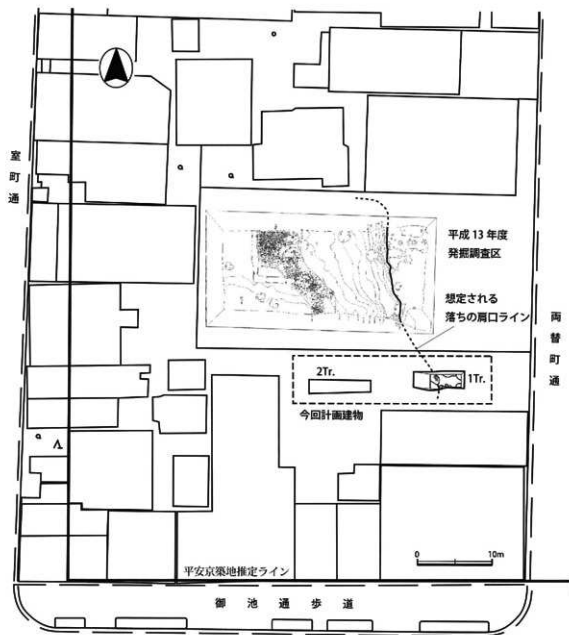


図5 近隣調査成果合成図 (S=1/500)
(平成13年度調査の平面図は、註1文献所載の室町前期遺構図による。)

註

1) 山本雅和『平安京左京三条三坊十町（押小路段・二条段）跡』（財）京都市埋蔵文化財研究所，2002年

II -2 平安京左京四條四坊九町跡 No. 42

1 はじめに

調査地は中京区柳馬場通三条下る極屋町 84-2 に所在する、東西に長い敷地である。京都市街地の中心部であり、中世以後、住宅密集地であり続けた地域である。本件の敷地も、「鰻の寝床」と呼ばれる洛中の宅地割をよく残している。

北隣で平成元年に行われた立会調査では、茶陶類を中心とした江戸初期の遺物が、コンテナ 90 箱以上も出土しており、三条通に面して瀬戸物屋があったものと推定されている¹⁾。今回計画の建物は、本市取扱要項に定める試掘対象となる規模には達していなかったが、このような状況を踏まえ、事業者側と協議した結果、試掘調査を実施することとなった。調査実施日は平成 19 年 5 月 15 日、調査面積は 28 m²である。

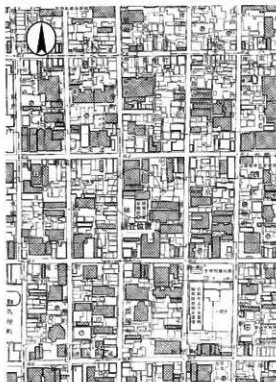


図6 調査位置図 (1:5,000)

2 層序と遺構

調査地が狭路である上、盛土層が厚く、土置き場に多くの面積を割かざるを得なかったため、トレンチは短いものを2箇所のみ掘削する結果となった。

層序 基本的な層序は、GL-1.40m までが江戸時代後期以降の盛土層（①層）で、次が京都ⅩⅡ期新段階²⁾の遺物を含む整地層（④層。②層もこれに対応すると思われる。）、-1.64m で時期

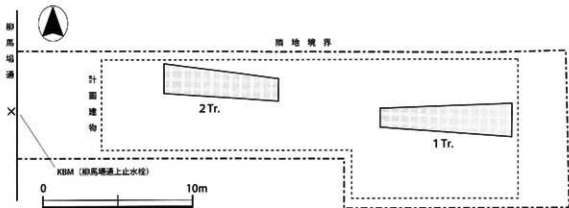
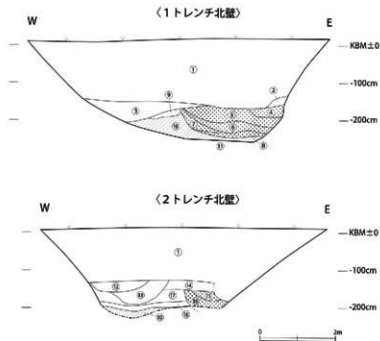


図7 調査区位置図 (1:250)



①江戸後期以降盛土 ②2.5Y 4/3 オリーブ褐色泥砂 (固く締まる。整地土か) ③10YR 4/1 緋灰色砂泥 (土層1) ④2.5Y 4/1 黄灰色泥砂 (土層2) ⑤5Y 4/1 灰色泥砂 (土層2) ⑥7.5Y 2/1 黒色砂泥 (土層2) ⑦2.5Y 4/2 暗灰黄色泥砂 (土層2) ⑧5Y 4/2 灰オリーブ色泥砂 (積砂多く含む。土層2) ⑨10YR 5/4 にふい黄褐色泥砂 (積まり良。僅かに遺物含む。中世前半以降?, 土層3) ⑩10YR 5/3 にふい黄褐色砂 (地山) ⑪10Y 4/1 灰色砂礫 (地山) ⑫10G 3/1 暗緑灰色泥砂 (円礫含む。土層4) ⑬5Y 3/2 オリーブ黒色泥砂 (土層5) ⑭2.5Y 3/3 暗オリーブ褐色泥砂 ⑮5Y 3/1 オリーブ黒色泥砂 (黒多く含む。土層6) ⑯5Y 3/1 オリーブ黒色砂泥 (土層6) ⑰10YR 4/2 灰黄褐色泥砂 ⑱10YR 4/1 緋灰色砂泥 (円礫含む)

図8 トレンチ土層断面図 (1:100)

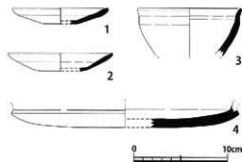


図9 土器2出土遺物尖測図 (1:4)

不詳の整地層に至り(⑱・⑳層), -2.00mで黄褐色砂の地山に達する。

遺構は、主としてトレンチの壁面において、土層6基を確認した。大きく分けて、上層の⑭層上面で成立するもの(土層4・5)と、下層の⑰層で成立するもの(土層2・6)とがあり、さらに、層的に土層2に先行する土層3と、後出する土層1がある。

土層2 1 Tr.の東半で検出した。東西長2.75m以上、検出面からの深さ0.75mを測る。今回の調査区内では最も多くの遺物が認められた。中でも、⑥層とした軟弱な黒色泥土中に多くの遺物が包含されており、京都中期古相頃の土師器皿や播鉢に混じって、志野の大皿や、織部かと思われる茶入、呉須赤絵皿、天目茶碗などが出土した。とは言うものの、復元可能な破片だけで1500点以上の茶陶があったという北隣の状況に比べると遙かに少なく³⁾、茶陶類の占める比率自体も低い。なお、同じ⑥層からは折り畳まれた漆紙の束も見つかっているが、文字の有無は不明である。

3 遺物

今回の出土遺物はコンテナに半分ほどもなく、左京域としては少ないと言ってよい。図9に主だったものを図示したが、いずれも土層2の⑥層から出土したものである。

1・2は土師器皿で、漆紙と折り重なって出土した。1は復元径10.2cmで、口縁には煤が付着する。2は復元径11.2cmを測り、肥厚する端部は心持ち内湾して収められる。3は天目茶碗。器壁の立ち上がりやや強めで、黒色の軸を掛ける。復元径は11.2cm。4は志野の大皿で、白色の軸肌を呈する。残存部の復元径は24.0cm。底部円盤の端部は稜線を作りだして一旦収め、

ここから壁面が急角度で立ち上がっている。残存部に僅かに残る痕跡からすると、四足程度の脚が貼り付けられていたようである。また、見込みには鉄絵らしいものが施されているが、残存率が1/8ほどで絵の全体像はよく分からない。

4 まとめ

今回検出した遺構は、廃棄土壌の類であると考えられるが、当初期待された茶陶類は少なく、北隣とは様相を異にすることが分かった。北隣の茶陶の大量出土は、江戸時代初頭、寛永期頃まで「瀬戸物屋町」と呼ばれた三条通の柳馬場富小路間に店を構えた陶器商が、選別した陶器をその裏庭に廃棄したものと推測されている。一方当該地は、江戸時代初頭においても、現在の宅地割りと同じく、柳馬場通に間口を開く両側町「壺屋町」の敷地であって、三条側の瀬戸物屋町には含まれていなかったものと考えられる。

なお、上記の土壌群の埋土中には、平安～鎌倉時代の遺物も散見されるものの、中世以前の明確な遺構は確認されなかった。

(堀 大輔)

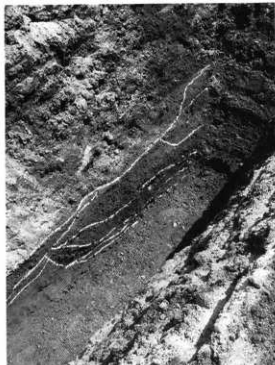


写真5 2Tr.土壌2検出状況(南西から)

註

- 1) 久世康博「平安京左京四条四坊」『京都市内遺跡試掘立会調査概報 平成元年度』京都市文化観光局、1990年
- 2) 小森俊寛・上村憲章「京都の都市遺跡から出土する土器の編年的研究」『研究紀要』第3号、(財)京都市埋蔵文化財研究所、1996年
- 3) 永田信一『特別展示 桃山文化の陶磁器～つちの中から～2』リーフレット京都 No.193、(財)京都市埋蔵文化財研究所・京都市考古資料館、2005年

III -1 平安京右京九条大路跡・唐橋遺跡 No. 14

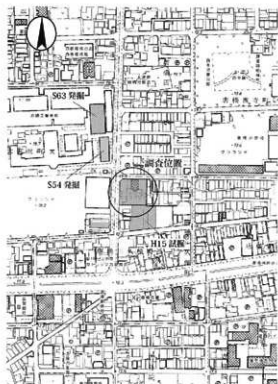


図 10 調査位置図 (1:5,000)

1 はじめに

調査地は、南区唐橋川久保町 18 番で、御前通と西寺緯 13 号線の交差点南東部分に位置する。当該地は、弥生時代から古墳時代の集落跡である唐橋遺跡の中央部分に相当するとともに、敷地の南北両端は、ほぼ九条大路の路面幅に相当する。

周辺では、西側に隣接する洛陽工業高校で昭和 54 年と昭和 60 年に発掘調査¹⁾が行われ、5 世紀から 6 世紀初頭頃の古墳時代の竪穴住居跡 8 棟のほか、平安時代前期から中期にかけて 6 度にわたって建替え続けられた掘立柱建物跡等が検出されている。一方、平成 15 年に当該地の南東隣接地で行われた試掘調査²⁾では 6 世紀後半の竪穴住居跡を主体とする古墳時代の遺構群が検出されている。

今回、当該地で宅地造成が計画されたため、計画道路の予定部分に東西方向の調査区を設定して試掘調査を実施した。調査区は、既存建物の基礎の影響により中央部分を除き遺構面が消失していた。中央部分では、土器小片を含む褐色砂泥の整地層上面で南北方向の溝 3 条を、下層で集石遺構をそれぞれ検出した。試掘調査日は平成 19 年 2 月 28 日、調査面積は 37 m²である。

2 層序と遺構

層序 層序は単純で、御前通のマンホール上に設定した仮ベンチマーク (KBM) - 15 cm で暗オリーブ色砂泥の旧耕作土、- 36 cm で灰色泥砂の床土、- 40 cm で褐色砂泥の整地層になり、- 57 cm で地山の褐灰色砂礫層に達する。遺構検出は、褐色砂泥層上面と地山上面で行った。

溝跡 調査区中央部の褐色砂泥層上面で成立する南北方向の溝 3 条を検出した。溝 1 は幅 35 cm ~ 45 cm、溝 2 は幅 35 cm ~ 50 cm、溝 3 については幅 20 cm ~ 30 cm である。いずれも深さは約 5 cm である。溝間の心々距離は約 70 cm の等間隔である。溝 1 からは須恵器の裏の胴部片と瓦小片が、溝 2 からは土師器小片が出土している。

集石遺構 4 地山直上で検出された遺構で、径 5 cm ~ 15 cm の川原石が南北 1.7 m、東西 1.1

mの範囲に集中している。遺物は、7世紀前半の土師器甕、坏、須恵器片等が出土している。

整地土 南北方向の3条の溝が成立する褐色砂泥の整地層で、鉄分を多く含み、非常に締まりが良い。出土遺物は、飛鳥時代から室町時代後期までの土器小片を多く含む。

3 遺物 (図13)

溝出土遺物 溝2からは京都VI期³⁾(12世紀末～13世紀台)の土師器皿1点のほか、土師器胴部片1点が出土している。溝1から外面にタタキ痕の残る須恵器胴部片4点、瓦小片1点が出土している。

集石遺構4出土遺物 須恵器は坏身口縁部1点、胴部1点、土師器は坏口縁部2点、甕胴部片25点、胴部小片11点、底部7点のほか、図化した坏1点(1)、甕(2)、把手(4)が出土している。坏(1)は口径18.0cm、器高5.8cmであり、口縁端部は外方に短く屈曲する。内



図11 試掘調査区位置図 (1:400)

4 まとめ

上層の遺構面で検出された3条の溝は、13世紀から16世紀初頭頃の土師器小片を含む整地層上面で成立していること、小規模かつ等間隔で連続することから耕作溝の可能性が高い。

一方、地山を遺構面とする集石遺構に含まれる遺物は、7世紀代のものが多く、洛陽工業高校や南東隣接地よりも若干新しい時期の遺構であり、飛鳥時代においても集落が営まれていたことがわかった。なお、九条大路の路面に結びつく痕跡は認められなかった。（馬瀬 智光）

註

- 1) 堀内明博・梅川光隆 「平安京九条二坊」『昭和60年度 京都市埋蔵文化財調査概要』((財)京都市埋蔵文化財研究所 1988年)
- 2) 堀 大輔 「唐橋遺跡」『京都市内遺跡試験調査概報 平成15年度』(京都市文化市民局 2004年)
- 3) 小森俊寛・上村憲章 「京都の都市遺跡から出土する土器の編年の研究」『研究紀要』第3号 ((財)京都市埋蔵文化財研究所 1996年) 以下、本節における編年は当該文献に従った。



写真6 拡張区上層遺構検出状況 (南東から)



写真7 拡張区集石遺構 (南から)

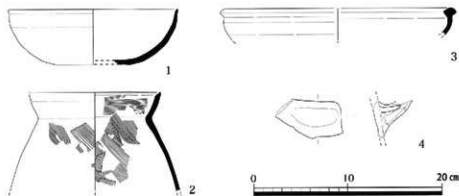


図13 出土土器実測図 (1:4)

IV - 1 本山古墳群 No. 17



図14 調査位置図 (1:5,000)

1 はじめに

調査地は左京区岩倉幡枝町333-3他の竹林で、深泥池の西から本山とケシ山の間を南北に貫通する府道下鴨静原大原線沿いにある。本山古墳群はその府道の西側にある本山の山頂および東麓に築かれた40基を超える群集墳であるが、これまでに同志社大学有志や京都大学考古学研究会が分布調査を行っているものの¹⁾、本格的な調査に至った例はない。調査地を含む岩倉盆地一帯は、窯跡とともに幡枝古墳群や八幡古墳群など古墳時代後期を中心とする群集墳が丘陵の裾から頂上にかけて数多く分布している。

今回、ここに幼稚園の建設計画が立てられたため、事前に現存する墳丘の範囲ならびに削平古墳の有無を確認する目的で平成18年3月26・27日に試掘調査を実施した。調査面積は82㎡である。

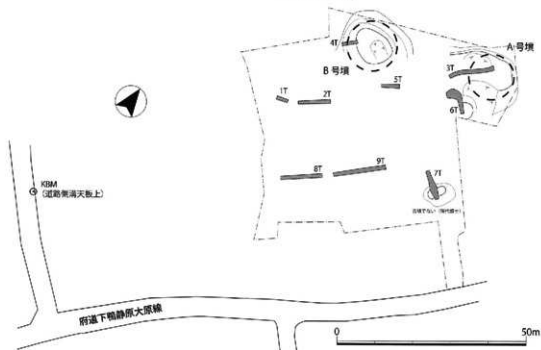


図15 調査区配置図 (1:1,000)

2 遺構

試掘調査実施前の現地踏査の際、調査地の北半において、外見上、古墳と思われるマウンドを3～4基確認しており、これらを中心に調査区を設定するとともに(3・4・6・7T)、敷地内の平坦地にも調査区を設けた(1・2・5・8・9T)。また、古墳と考えられる地点とその周辺(3・4・6・7T)を中心に平板測量をおこない、墳丘および周溝の範囲の特定に努めた。ただし、時間的な制約もあり、等高線を結ぶのではなく主に傾斜変換点を拾い上げて作図した(図15)。

3トレンチ(3T) 石室や周溝など、積極的に古墳と断定できるような痕跡は確認されなかったが、墳丘盛土の可能性がある土層を表土直下で確認した。現在のところ、古墳であることを否定する根拠もなく、現地形は高まりの周りに周溝がめぐるとような形状を呈していることから、古墳として扱うこととする(A号墳と仮称)。現地形から10m強の円墳と推定される。

4トレンチ(4T) マウンドの中心にある石室の抜き取り痕と思われる地表面の陥没など、現地

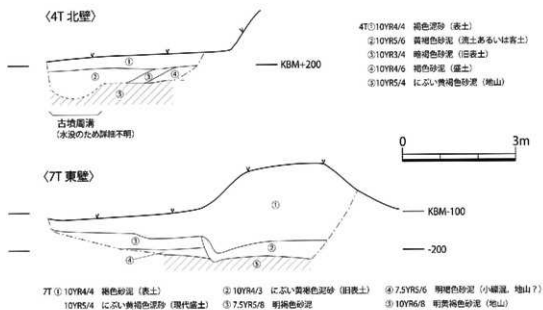


図16 調査区断面図(1:100)



写真8 4トレンチ北壁(東から)



写真9 B号墳全景(南から)



写真10 7トレンチ全景（西から）

形に残された状況から古墳であると推定し、墳丘裾および周溝を確認するために設定した調査区である。調査区の北側にあるマウンドに向かって立ち上がる旧表土(4T③層)と盛土(同④層)が認められ、調査区の南端では古墳の周溝と考えられる落ち込みを検出した(写真8)。周溝は埋没していたものの暗渠化しており、前日までの悪天候もあって、埋土掘削と同時に湧水のため水没した。10m強の円墳に復元され、石室石材の抜き取り痕と思われる凹地の形状か

らして東方向に開口していたと推測される(B号墳と仮称・写真9)。

6トレンチ(6T) 表土下で落ち込みなど、人工的に掘削された痕跡を確認したが、出土遺物がなく時期不明のため、古墳か否かは判断しがたい。筒栽培に伴う客土とも考えられる。

7トレンチ(7T) こもりと小高い円丘で石室石材に似た人頭大の礫が露出していたため、調査前から古墳であることを確実視していたものであるが、調査の結果、高まり全てが現代盛土であることが明らかになった(写真10)。この盛土の地点は1972年刊行の『京都府遺跡地図』にも古墳としてドットが落とされ、以後、古墳として周知されているが²⁾、近隣住民の話によれば、約40年前に廃棄物とともに盛土したものだという。実際、盛土にはガラスやプラスチックの小片などの廃棄物が混入していた。

これらのほかに、敷地内の平坦部分に設けた調査区(1・2・5・8・9T)では、表土や客土の下、深くてもGL-0.6mで地山に至り、古墳の痕跡は全く確認できなかった。

3 まとめ

今回の調査では、本山古墳群の2基の古墳の正確な位置を把握することができた。古墳は2基ともに径10m強の円墳と推定される。また、これまで古墳として周知されていたマウンドが現在盛土であったことが判明した。

なお、調査によって判明した古墳の保存については、現在事業者側と協議中である。

(宇野 隆志)

註

- 1) 同志社大学文学部文化史学専攻生・幡枝地区遺跡研究グループ1971『京都市本山・幡枝地区遺跡分布調査の記録』考古学資料集1
京都大学考古学研究会(編)1986『第38とれんち』
- 2) 京都府文化財保護課(編)1972『京都府遺跡地図 第4分冊』京都府教育委員会

IV-2 御所ノ内町遺跡 No.81

1 はじめに

調査地は、三条通（府道二条停車場嵐山線）と大映通の交差点南西に位置する松竹京都撮影所の南西隅部分に位置し、広域立会調査¹⁾により発見された御所ノ内町遺跡の中央南端部分に位置する。

当該地で松竹撮影所の関連施設の建替え工事が計画されたことに従い、御所ノ内町遺跡の実態解明と遺跡の残存状況を探る目的で試掘調査を平成19年8月20日に実施した。調査面積は61㎡である。

周辺の調査事例は少なく、広域立会調査では、当該地の西側で平安時代前期の遺物包含層を、当該地の西及び南側で平安時代中期から後期の遺物包含層をそれぞれ確認している。今回の試掘調査は、周知後では平成18年度の試掘調査²⁾に続き第2次調査となる。

この試掘調査の結果、平安時代前期に埋没した南北方向の区画溝を検出したため、基礎掘削深度の変更を行った上で、この遺構を地中に保存することとなった。



図17 調査位置図(1:5,000)

2 層序と遺構

層序 第1トレンチ(1T)では、計画建物の東側南北通路の南出入口にある門扉部分に設定した仮ベンチマーク(KBM3)+80cmで表土、+40cmでオリーブ褐色泥砂、+17cmで径10~20cmの礫を多く含む灰黄褐色泥砂と続き、-30cmで地山である暗灰黄色砂層に達する。オリーブ褐色泥砂層で土師器小片が出土したものの、全体に氾濫堆積の様相を示している。第2トレンチ(2T)では、KBM3+46cmで表土、-10cmでにぶい黄褐色泥砂と続き、-36cmで土師器小片を含むにぶい黄褐色泥砂層と、地山のにぶい黄褐色砂泥層に達する。溝1はこれら両層を切って成立していた。

溝1 2T及び3Tの地山上で検出したこの南北溝は、幅150cm、深さ75cmを測り、延長約8mにわたり検出した。溝の埋土は、径5~20cmの礫を多く含む黒褐色泥砂であり、土師器や緑釉陶器などが多数出土した。この溝はほぼ真南北を向き、1Tの南半部にこの溝が延長する

はずである。しかし、1 Tでは溝の痕跡はない。1 Tの北端部から南18 mの地点以南で、溝1の成立面であるにぶい黄橙色泥砂層が認められることから、溝1は近世以後に削平された可能性とともに、1 Tと2 Tの間で東西どちらかに屈曲した可能性が考えられる。

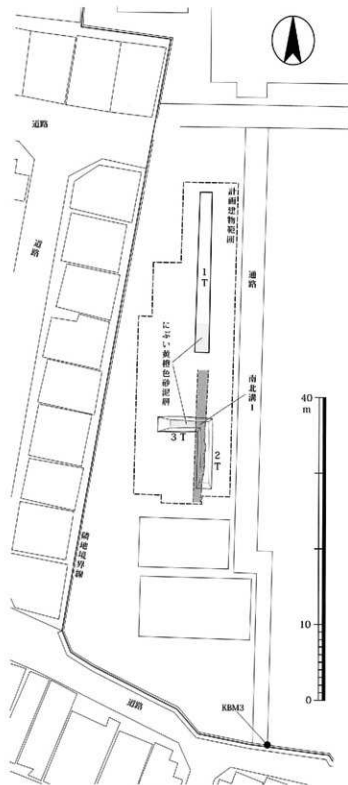


図18 試掘調査区位置図(1:500)

3 出土遺物

1 Tで出土した遺物はわずかに土師器小片7点であり、出土遺物103片のうち、96片が溝1から出土している。溝1出土遺物は、検出時及び断面観察のために幅40 cm程度を掘削した際に出土したものである。以下では、溝1出土の遺物を取り上げる。

土師器 溝1から出土した破片の66%を占め、皿・坏・甕が出土した。皿(1)の口縁部の形態が溝1出土の皿で最も多い。口径15.8 cm、器高1.9 cmを測る。甕(2)は口径21 cmを測り、内面に横方向のハケ目、胴部に指押さえの痕跡が残る。

緑釉陶器 溝1から椀(1点は皿の可能性あり。)が出土している。椀(3・4)は円盤状高台をもつ。3は口径21 cm、器高6.2 cm、高台径10.2 cmを測り、4は高台径5.6 cmである。

須恵器 溝1から出土した遺物のうち、20%を占める。坏・坏蓋・壺・甕等が出土している。5は壺もしくは瓶の口縁部であり、口径11 cmを測る。蓋(6・7)はいずれも無紐であり、6は口径14 cm、器高1.8 cm、7は口径13.8 cm、器高1.5 cmを測る。鉢(8)は内湾ぎみに立ち上がった後、口縁部が鋭く外上方に屈曲する。

口径 30 cmを測る。

黒色土器 内面のみ黒化処理された甕(9・10)が出土している。9は内外面とも摩滅著しく調整は不明であるが、球形の胴部に短く外反する口縁部をもち、口径 10.5 cmを測る。10は内面にミガキの痕跡がわずかに残る。10も球形の胴部に短く外反する口縁部をもつが、口縁端部がわずかに上方に立ち上がる。

他に平瓦片や炭化物等も出土している。この溝1の出土遺物は須恵器帯の中に一部8世紀に遡るものも認められるが、京都Ⅱ期古段階(9世紀中頃)³⁾のものが大半を占めている。腐化したものは全てこの時期のものであり、溝1が埋没したのもこの頃と考えられる。

3 まとめ

太秦は『日本書紀』雄略15年の条に秦酒公が天皇に「萬豆麻佐」の姓を賜ったことにちなむとされ、渡来系氏族である秦氏が勢力を築いた土地である。特に当該地を含む「御所ノ内町」は寛永元年(1624)の『山城國葛野郡安養寺村由緒』に、秦川勝の4代前から4代後のものまで、合わせて9代の間秦氏の居城であったとされる一方、厩左大臣藤原信隆を父にもち、太秦内府とも坊内府とも呼ばれる内大臣藤原信清⁴⁾(1159～1216)の別業があったともされる。

今回の試掘調査で検出した真南北に近い向きをもつ溝1は、埋没時期が平安時代前期である9世紀中頃と考えられるため、江戸時代の文献にいう秦氏の居宅とも、藤原信清の別業とも異なる。ただし、方位や幅150 cm、深さ75 cmという溝の規模、わずかな掘削面積でも緑釉陶器をはじめとする遺物が出土することから、平安時代前期にこの太秦の地に明確な意図をもった区画割が行われたこ

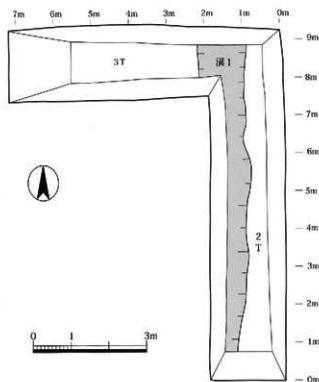
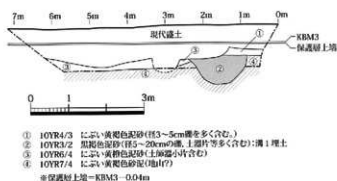


図19 2T・3T遺構検出図(1:100)、
2T・3T北壁土層断面図(1:100)



写真 11 2T・3T 溝1 検出状況 (南東から)

とが明らかとなった。

最後に、今まで不明瞭であった御所ノ内町遺跡で初めての明確な遺構であり、周辺地域での調査の進展により、この遺跡の性格が明らかになると考えられる。

(馬瀬 智光)

註

- 1) 平田 泰 「太秦地域の遺構分布」『京都嵯峨野の遺跡—広域立会調査による遺跡調査報告—』(『京都市埋蔵文化財研究所調査報告』第14冊 (財)京都市埋蔵文化財研究所 1997年)
- 2) 「試掘調査一覧表」『京都市内遺跡試掘調査報告 平成18年度』(京都市文化市民局 2007年)のNo.86 (06S511)の試掘調査で、時期不明の井戸状遺構1基を検出している。
- 3) 小森俊寛・上村憲章 「京都の都市遺跡から出土する土器の編年の研究」『研究紀要』第3号 (財)京都市埋蔵文化財研究所 1996年) 以下、本節における編年は当該文献に従った。
- 4) 国史大辞典編集委員会編 『国史大辞典』第12巻 ((株)吉川弘文館 1996年)

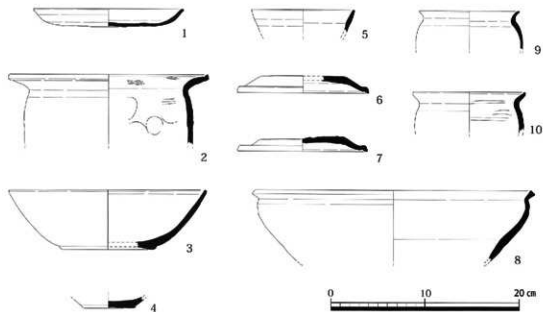


図 20 出土土器実測図 (1:4)

IV-3 史跡 天塚古墳

1 はじめに

調査地は右京区太秦松本町所在の天塚古墳である。天塚古墳は全長約71mに推定される前方後円墳で、墳丘部分は1978(昭和53)年に国史跡に指定されている。

現在、天塚古墳周辺には多くの宅地や工場が立ち並び、天塚古墳の北東に隣接して築かれた清水山古墳は消滅して跡形もない。ただ、大正期の古墳周辺の測量図によれば、清水山古墳の墳丘とともに天塚古墳に伴う盾形を呈する周濠を確認することができ、当時の状況を窺い知ることができる(図22)。

主体部は横穴式石室2基で、後円部西側および西くびれ部に設けられている。現在、石室内には稲荷が祀られており、奥壁まで確認できないが、石室は比較的小振りの石材で構築され、祠を設置するにあたって、石室の石積みに一定の改変や補修が加えられていることがわかる¹⁾。遺物はいずれの石室から出土したかは定かでないが、銅鏡・刀剣・鉄鏃・挂甲小札・馬具・玉類・須恵器など豊富な副葬品が出土している²⁾。

今回、1980年代後半に前方形西側の墳丘裾付近から採集された埴輪が土地所有者から提供された。これまで天塚古墳における調査は、立会調査で周濠の一部と思われる落ち込みを確認している程度で³⁾、本格的な発掘調査は実施されていない。また、埴輪については埴輪列の存在が指摘されていたのみで、詳細は明らかになっていない。したがって、これを機に採集された埴輪の実測図を紹介することにしたい。

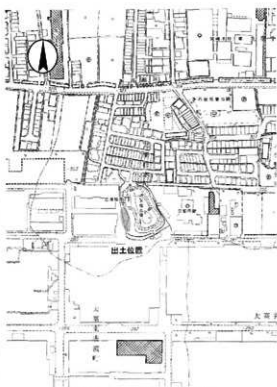


図21 位置図(1:5,000)

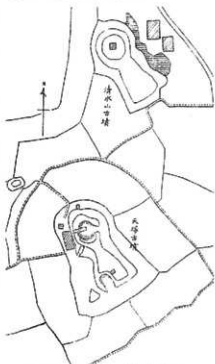


図22 大正期の古墳位置図
(梅原1922より転載)

2 遺物

埴輪の出土位置は詳らかでないが、西くびれ部および西側前方部の裾付近からさらに西側の平地にかけて出土したらしく、おそらく埴丘各所に樹立されていた埴輪が埴丘裾あるいは周濠に落ち込んだものと推測される。埴輪は合計でコンテナ1箱分が採集されたが、すべて円筒埴輪片である。以下、図化した破片資料の実測図を掲載するとともに、形態および製作技法について項目ごとに述べる。

全形 底部径～口縁部径は22.0～28.5cmの間に復元され、上方にやや開く円筒形を呈する。

口縁部 わずかに外反するもほぼまっすぐに立ち上がる(1)。端部は外面、上面、内面の3面ともに丁寧にナデが施される。

突帯 突出度は総じて低く、断面形態はしっかりした台形を呈するものと三角形に近いものがある。断面が三角形に近い突帯は、粘土を器壁に貼り付けた後、ナデによる整形が不十分であったために生じたもので、古墳時代後期の円筒埴輪にしばしば認められる特徴である。

透孔 確認される透孔はすべて円形で、径5～6cm程度に復元される。各段に2孔ずつ、互い違いに配置される。

法量 突帯間隔は12.5～14.0cm、底部高は14.0cmを測る(2・4～6)。連続する2段にわたって透孔が2孔ずつ配置されており(2・3)、これを中間段とすると、3条突帯4段構成(2・3段透孔)あるいは4条突帯5段構成(2～4段透孔)が復元される。

内外面調整 外面調整は一次調整タテハケを基調とし、二次調整は施さない。タテハケの傾きは左上がりのものと右上がりのものがある。内面調整との対応関係からすれば、これらの違いは工人個人の癖、特に利き手の違いに関連するとみてよい。内面調整は個体により異なるが、タテハケ、ナメハケ、ナデが施される。口縁部内面にはヨコハケが施される(1)。

底部調整 第1段(底部)の外面には板押圧の痕跡がみられ(写真12)、それと対応する内面には指頭圧痕が顕著に認められる。乾燥工程を経ずに底部から口縁部を成形したことで生じた自重による底部の歪みを矯正した底部調整の痕跡である。埴輪の全形が完成した後、埴輪を倒立させて底部内面に手を添えながら板状工具で底部外面を叩き押さえたものと考えられる。外面の調整痕には押圧に用いた板状工具のコーナー部分が観察され(6)、第1段突帯まで底部調整が及んでいる例も確認される(5・写真13)。

焼成 いずれの破片にも黒斑は認められず、窑窯で焼成されたと考えられる。橙色系の土師質、青灰色系の須恵質双方の破片が存在するが、焼き上がりはいずれも堅緻である。

胎土 石英・長石・雲母などの含有が肉眼で観察されるが、各破片からは顕著な違いは認められない。

時期 川西宏幸氏による円筒埴輪編年で見れば、外面調整や底部調整、突帯の形態などの各属性の特徴からV期でも古い段階に属すと考えられる⁴⁾。石室から出土した須恵器はMT15型式に相当し⁵⁾、埴輪もそれに相当する年代が与えられるだろう。

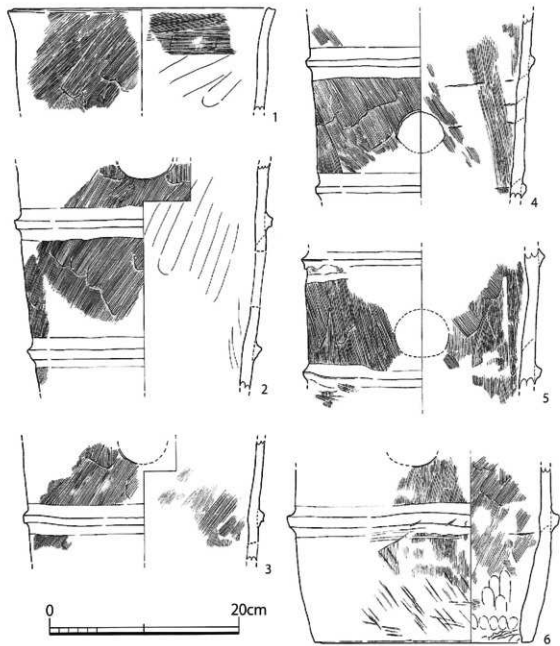


図23 埴輪実測図(1:4)



写真12 底部調整①(6)



写真13 底部調整②(5)

3 まとめ

天塚古墳は古墳時代後期に桂川左岸の嵯峨野一帯に築かれた嵯峨野古墳群に含まれる。嵯峨野古墳群は、墳形および墳丘規模、立地から、古墳群南辺の扇状地上に位置する前方後円墳群（段ノ山古墳・天塚古墳・清水山古墳・仲野親王陵古墳・蛇塚古墳）、古墳群中央の微高地に立地し、群を形成しながらも独立して築かれたやや大型の円墳群（甲塚古墳・大覚寺古墳群・嵯峨七ツ塚古墳群・広沢古墳群など）、嵯峨野北辺に連なる各丘陵の頂から裾にかけて築かれた群集墳（朝原山古墳群・長刀坂古墳群・御堂ヶ池古墳群など）の三つのグループに大別され、被葬者の階層性が端的に反映されていると考えられる。

古墳時代後期は、生産地（埴輪窯）から同一流域内の古墳を中心に埴輪の広域供給が活発化しはじめる時期にあたる。嵯峨野古墳群で埴輪の出土する古墳は、現在のところ天塚古墳と隣接する清水山古墳の2基のみであって、嵯峨野古墳群を含む桂川流域においても埴輪の広域供給の可能性が十分に考えられる。今後、桂川右岸域や向日丘陵周辺の古墳出土の埴輪との比較検討が必要となってくるだろう。加えて、太秦広隆寺付近から古墳時代後期の埴輪の散布が確認されており⁶⁾、埴輪を樹立した未知の古墳の存在についても注目される。（宇野 隆志）

註

- 1) 京都大学考古学研究室（編）1971『嵯峨野の古墳時代』
- 2) 梅原末治 1922「太秦村天塚及び清水山古墳」『京都府史蹟勝地調査会報告』第3冊 京都府
小野山節他（編）1968『京都大学文学部博物館考古学資料目録』第2部 京都大学文学部
- 3) 野村篤美・家崎孝治 1985「天塚古墳・清水山古墳」『京都市内遺跡試掘立会調査要報 昭和59年度』京都市文化観光局
- 4) 川西宏幸 1978「円筒埴輪総論」『考古学雑誌』第64巻第2号 日本考古学会
- 5) 田辺昭三 1966『陶器古窯址群Ⅰ』平安学園考古学クラブ
- 6) 加納敏二他（編）1997『京都嵯峨野の遺跡—広域立会調査による遺跡調査報告—』京都市埋蔵文化財研究所調査報告第14冊（財）京都市埋蔵文化財研究所

IV-4 山科本願寺跡 No.88・89

1 はじめに

山科本願寺は、山科盆地中央部を流れる山科川の右岸に位置し、文明10年(1478)から蓮如によって造営が開始された寺院跡である。完成した山科本願寺は、主要建物のある「御本寺」、有力末寺の坊舎のある「内寺内」、門徒の居住地のある「外寺内」の3つの郭を土塁と濠で区画していた。

今回の調査地は、京都市山科区西野広見町5-7, 5-10で、外寺内に位置し、すぐ南には御本寺北西部の土塁が残存している。したがって、調査地には、外濠が存在していたと想定された。これまで、御本寺外濠の調査は山科本願寺第1次調査で東部を¹⁾、第6次調査で南西部を²⁾、平成17年度の試掘調査で西部を³⁾検出している。

今回、当該地で宅地建設が計画されたため、山科本願寺跡の外濠を確認するための調査区を南北方向に設定した。調査の結果、敷地南端で山科本願寺跡の外濠北肩を検出したほか、建物の礎石と、その据付穴などを検出した。試掘調査は、平成19年9月25日に実施した。調査面積は33㎡(No.88調査区28㎡, No.89調査区5㎡)である。

2 層序と遺構

層序 基本層序は現代盛土、旧耕作土、灰オリーブ色泥砂、砂礫層(地山)である。灰オリーブ色泥砂層で遺構を検出した。No.88調査区では近世の井戸、山科本願寺跡の外濠北肩、時期不明の土坑、礎石を、No.89調査区ではNo.88調査区で検出した外濠北肩のつづきを検出した。

井戸 近世の石組井戸である。掘方は径約2mで、石は東壁で2石検出した。ただし、井戸の西半を検出したにすぎず、詳細は不明である。

濠 調査区の南端で濠跡の北肩を検出した。今回の調査区では、濠の北肩を検出したにすぎず、濠の幅などについては明確にしがたい。深さについても北肩から1.4m(KBM-2.4m)まで掘削したが底まで達しなかった。



図24 調査位置図(1:5,000)

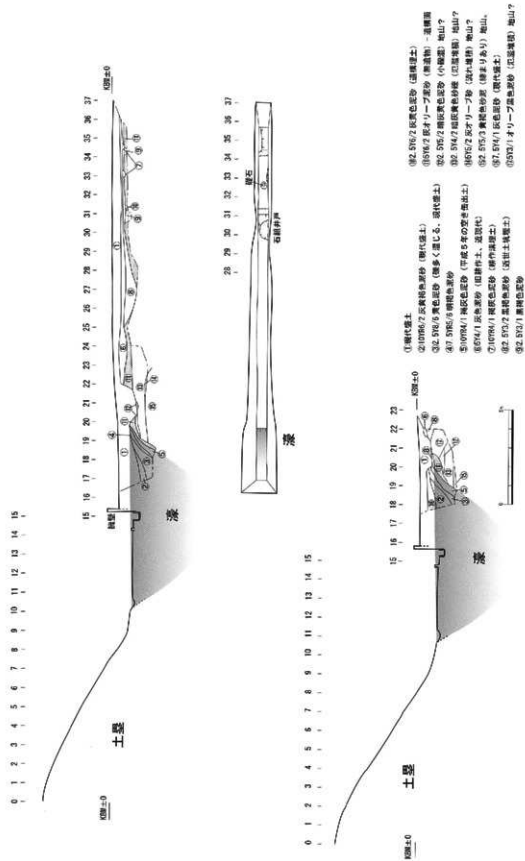


図 25 No. 88 西壁断面図・平面図 (S=1/200)・No. 89 西壁断面図 (S=1/200)

調査区の南隣接地に残存する土塁跡と今回の調査で検出した濠跡の関係をj知るために、土塁の地主の協力を得て断面図を作成した。その結果、残存土塁の下端を濠の南肩とすると、濠の幅は約9～10mの規模となること、土塁の高さは、今回の調査で検出した濠北肩から約4.5～5.3mの高さが残存していることがわかった。

礎石 礎石の据付穴は径約0.35mの円形で、礎石は15～20cmである。南ではこの礎石に組み合う礎石を検出できなかったため、調査区を北に延長したが、つづきを検出できなかった。

土坑 土坑を5基検出した。遺物が出上していないため時期は不明である。ただし、重複関係により近世の井戸より古く、また土坑どうしも重複しており、数時期の変遷があったことがわかる。

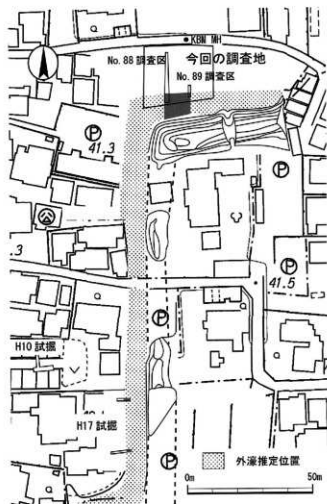


図26 外濠復元図(1:1500)

(岡田保良・浜崎一志1985年をもとに作図)

3 まとめ

今回の調査では御本寺の北を画する土塁の外濠北肩を検出することが出来た。調査地の南に残存している土塁から断面図を作成することができ、土塁と濠(上場)の高低差は約4.5～5.3m、濠の幅は9～10mであることがわかった。山科本願寺第1次調査で見つかった濠跡は幅が19.5m、第6次調査では幅5～12mの濠を検出している。また、平成17年の試掘調査で検出した濠は幅が約7mと想定されている。以上の成果から、山科本願寺の濠の幅については場所によって広い箇所と狭い箇所があったことが分かる。(家原 圭太)

註

- 1) 岡田保良・浜崎一志1985「山科寺内町の遺跡調査とその復元」『国立歴史民俗博物館研究報告 第8集』
- 2) 永田宗秀・近藤知子1999「山科本願寺跡1」『平成9年度 京都市埋蔵文化財調査概要(財)京都市埋蔵文化財研究所』
- 3) 長谷川行孝2006「山科本願寺跡」『京都市内遺跡試掘調査報告 平成17年度』京都市文化市民局

IV-5 鳥羽離宮跡・鳥羽遺跡 No.96



図27 調査位置図 (1:5,000)

1 はじめに

調査地は伏見区中島秋ノ山町100-1で、名神高速道路京都南インターチェンジの南に位置する。この地は鳥羽離宮内の北殿推定地にあたる。北殿内には、長承二年(1134)頃に鳥羽上皇が宇治平等院を模して造営を開始した寺院である勝光明院が存在しており、これまでに経蔵や阿弥陀堂、圓池などが発掘調査により検出されている。

当該地周辺の調査では、道路を挟み東隣で昭和57年に発掘調査(第81次調査)を行っており、池の汀を検出している¹⁾。また、西隣では昭和63年度に発掘調査(第128次調査)を行い、第1調査区(敷地北端)で陸地、第2調査区(敷地南端)で中島を検出している²⁾。

今回、当該地において事務所と倉庫の建設が計画され、周辺の調査成果から、当該地周辺で

は遺跡の残りが良好であり、池の汀が検出されることが予想されたため試掘調査を行った。調査は平成19年12月19日に行い、計画建物が2箇所に分かれているため、南側に1Tr.(東西方向)を、北側に2Tr.(南北方向)を設定した。調査面積は26.8㎡(1Tr.が3.2㎡、2Tr.が23.6㎡)である。調査地の現状は、敷地の北半が南半よりも約60cm低くなっている。

2 基本層序と検出遺構

1Tr.の基本層序は、現代盛土(KBM-0.5m)、近世盛土(KBM-0.5～1.8m)、池埋土(KBM-1.8～2.4m)、地山(KBM-2.4m～)である。調査面積が狭小のため、1Tr.が池内であったことを確認するにとどまった。

2Tr.の基本層序は、現代盛土・近世盛土の下層で、調査区の南半では池の堆積、北半では陸地となる整地層を検出した。地山はKBM-2.1mで検出した。陸地は4時期の変遷がみられ、時期が下るにつれ北に広がる。陸1は2Tr.南端から8m付近(KBM-1.55m)、陸2は8.6m(KBM-1.4m)、陸3は10m(KBM-1.2m)、陸4は11m付近(KBM-0.9m)で池と陸の境を検出した。陸1～3は池埋土の出土遺物から平安～中世とみられる。第81次調査では、池の底石や、汀部

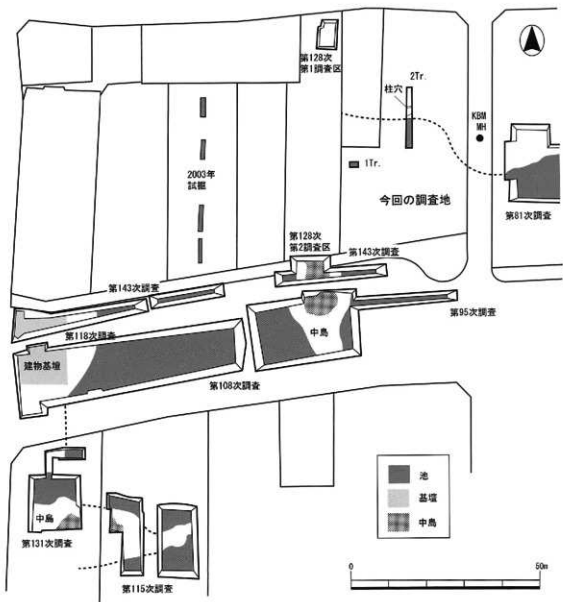


図28 調査位置図(1:1000)

分に径約10cmの円礫を貼り付けた痕跡(州浜)が見られたが、今回の調査ではそういった痕跡は見られなかった。

その他の遺構は、陸1の整地層から掘り込まれた柱穴が1基検出された。この柱穴は柱掘方の規模が径60cmで、柱痕跡や柱採取穴は見られなかった。この柱穴に組み合わせる柱穴は北側、南側には見られないため、池と陸地を画する塀であった可能性が高い。

3 出土遺物

遺物は全体的に少なく、池の埋土から瓦片と土師器片が少量出土しすぎない。

出土した瓦はどれも布目瓦である。陸3の時期の池埋土である⑨層、陸2の時期の池埋土である⑫・⑬層から出土している。

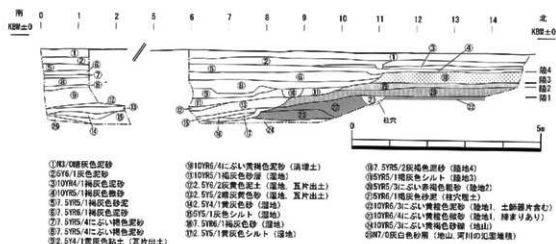


図 29 2Tr. 西壁断面 (1:100)



写真 14 2Tr. 西壁断面 (北東から)

4 まとめ

調査の結果、勝光明院の園池と陸部の境を検出した。道路を挟み東側の第 81 次調査で検出している汀は、西側でやや南に湾曲していたことから、今回も汀が調査地の南半分で検出されるものと想定された。しかし、調査地の中央北寄りでは池の汀を検出し、池が北に湾曲することがわかった。また、当該地の西隣で行われた第 128 次調査第 1 調査区では陸部を検出しており、その西隣では 2003 年の試掘調査で敷地全面が池状の堆積であったことが明らかにされている³⁾。

以上のような成果から、勝光明院における園池北汀の形状がほぼ明らかになった。その形状は、単純な円弧状ではなく、かなり出入りがあった状

況がわかる (図 28)。また、造り替えを 3 度行っており、次第に池の汀が北に広がることなど、勝光明院における園池北汀の形状と変遷を知るうえで貴重な成果を得ることができた。

(家原 圭太)

註

- 1) 鈴木廣司・吉崎伸「第 81 次調査」『昭和 57 年度 京都市埋蔵文化財調査概要』1984 年
- 2) 磯部勝・鈴木久男「第 128 次調査」『羽鳥離宮跡発掘調査概報』1988 年
- 3) 京都市文化市民局「京都市内遺跡試掘調査概報 平成 15 年度」2004 年

IV-6 下鳥羽遺跡 No.100

1 はじめに

調査地は伏見区竹田松林町 58, 59 で、新油小路通と津知橋通の交差点を少し南下した西側の敷地である。周辺は商工業用地と農地が入り交じる一帯であるが、当該地は新油小路通の路面高に合わせて盛土され、調査時点では青空駐車場として使用されていた。隣接する農地との比高は 1.1m を測る。

これまでの試掘・発掘調査では、当該地の南隣地で竪穴住居跡ほかを検出されている一方¹⁾、すぐ北側では湿地ないし氾濫堆積の地盤となっており²⁾、遺構の有無が予測しづらい状況であった。今回、ここに店舗の新築が計画されたため、平成 19 年 5 月 16 日、試掘調査を実施するのはこびとなった。調査面積は 16 m² である。



図 30 調査位置図 (1:5,000)

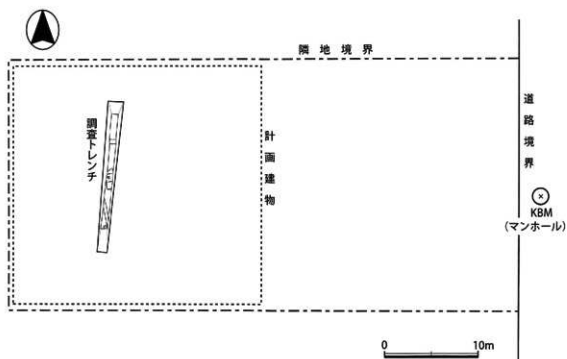


図 31 調査区位置図 (1:400)

2 層序と遺構

層序 観察された土層はほぼ水平堆積で、上から現代盛土・旧床土(②層)・暗灰黄色泥砂(④層)・にぶい黄褐色砂泥(⑤層)・褐色砂泥(⑥層)・褐灰色泥土(⑨層)・地山(⑩層)である。地山層は暗緑灰色粘土の湿地堆積で、そのすぐ下は砂礫となり、湧水を伴う。また、旧耕土層は失われている。遺構は、④層と⑧層の各上面で確認し、⑧層上面で精査を行った結果、トレンチ北端で竅穴住居1を、その南に接して不明遺構2ほかを検出した。

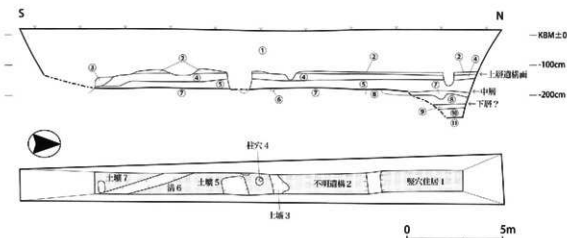
遺構面である⑧層は、水気も少なくかなり安定した地盤であり、当該地の北側一帯とは様相が異なる。また、2つ南の敷地で確認したように³⁾、遺構面がグライ化した状況も認められない。なお、下層である⑨層にも古墳時代かと思われる土師器片が少量含まれているが、部分的な断ち割りによる確認であり、遺構面として成立するかどうかは不明である。

竅穴住居1 トレンチの北端で南北4.3m分を検出し、さらにトレンチ外へ広がっている。検出面から床面までの深さは約15cm。埋土は細礫混じりの灰黄褐色泥砂(⑦層)で、遺物を多く包含している。採取した遺物のほとんどが小片であるため年代を決めたいが、古墳時代に属するものと思われる。

不明遺構2 トレンチの南3/4、長さにして14m以上が、すべて竅穴住居1と同じ埋土で占められており、不明遺構2とした。複数の住居址が切り合っているものと思われるが、その切り合いについては明らかにし得なかった。

その他の遺構 不明遺構2を切って、土壌3・柱穴4・土壌5・溝6・土壌7が成立している。土壌3は不定形、土壌5は隅丸方形の土壌で、土師器片を多く包含している。柱穴4は掘方径25cm、柱当たり径10cmを測る。溝6は土壌7を切って成立しており、幅約30cmを測る。

上層遺構面である④層の遺構については、断面での観察にならざるを得なかったが、南端で



①現代盛土・覆土 ②5Y 5/1 灰色砂泥(旧床土) ③10YR 3/2 黒褐色砂泥 ④2.5Y 5/2 暗灰黄色泥砂(遺物包含) ⑤10YR 5/4 にぶい黄褐色砂泥(遺物包含)
⑥2.5Y 3/2 黒褐色砂泥(土壌3埋土、炭・遺物多く含む) ⑦10YR 4/2 灰黄褐色泥砂(竅穴住居1・2埋土、遺物多く含む、細礫含む) ⑧10YR 4/4 褐色砂泥
⑨10YR 4/1 褐灰色泥土(遺物少量含む、細礫含む) ⑩10GY 4/1 暗緑灰色粘土(地山) ⑪10GY 4/1 暗緑灰色砂礫(湧水あり)

図32 中層遺構平面図及び西壁土層断面図(1:125)

土壌1基を確認した(図31・断面図③層)。黒褐色砂泥のよく締まった埋土であるが、時代は不明である。

3 まとめ

今回の試掘では、上下2層ないし3層にわたる遺構面の存在を確認した。その検出深度は、敷地東側歩道上のマンホールを仮ベンチマークとしたとき、それぞれ、-1.30m、-1.75m、-2.30mである。これにより、当該地以南、南方の東西道路以北には、狭い範囲ながら稠密に遺構が分布することが改めて確認できた。

なお、本件については、建物基礎の設計変更により、上層遺構面に対し十分な保護層を確保し、遺構が地下保存されることになったため、本格的発掘調査の実施は見送ることとなった。

(堀 大輔)



写真15 敷穴住居1検出状況(北東から)

註

- 1) 京都市文化観光局『京都市内遺跡試掘調査概報平成4年度』調査一覧表No.61, 1993年
- 2) 京都市文化市民局『京都市内遺跡試掘調査概報平成13年度』調査一覧表No.69, 2002年
- 3) 堀 大輔「下島羽遺跡」『京都市内遺跡試掘調査報告平成18年度』京都市文化市民局, 2007年

V-7 下三栖城跡 No. 106



図 33 調査位置図 (1:5,000)

1 はじめに

調査地は、伏見区横大路下三栖辻堂町 56 番の一部、60 番の一部であり、新油小路通と外環状線との交差点北西方向に位置する。当該地を含む下三栖城跡は、山下正男氏の研究¹⁾では横大路被官衆の一人が築いたものとされる。下三栖城跡のある下三栖は、中世下三栖庄を前身とする。織田信長が天正 3 年 (1575) に内侍所以下禁裏の所職に計 433 石を給付したが、その中に塔森、吉祥院、嶋とともに下三栖庄も含まれていた。また、現在の下三栖集落の南端には三栖神社が鎮座しており、この神社の本殿北側に下三栖城跡の濠が残っている。本殿南側よりも南方は広大な湿地帯が広がる。

下三栖城跡の内部での調査は今回の試掘調査

が最初である。しかし、城域の東外側に広がる下三栖遺跡では平成 8 年度に立会調査²⁾と発掘調査³⁾が、以後平成 9 年度⁴⁾、平成 10 年度⁵⁾、平成 11 年度⁶⁾の合計 5 度にわたる調査が行われ、弥生時代から古墳時代の集落と、鎌倉時代を中心とする平安時代末から室町時代末までの集落跡が発見されている。特に中世集落跡は下三栖城跡の時期と重複することから、城跡と密接に関係することが考えられる。

試掘調査は平成 19 年 12 月 27 日に実施し、3箇所の調査区の合計面積は 36 m²であった。試掘調査を実施した結果、南北方向の濠跡と東西方向の濠を確認することができた。また、この濠跡は協議の結果、保護層を確保の上、地中保存が図られることになった。

2 層序と遺構

層序 3箇所の調査区とも基本層序は同じであり、西側道路上のマンホールに設定した仮ベンチマーク (KBM) + 18 cm で現代盛土 (現耕作土含む)、- 157 cm で旧耕作土、- 165 cm で灰オリーブ色砂泥 (床土)、- 178 cm で灰オリーブ色泥砂 (中世整地層)、- 220 cm で地山の黄褐色砂泥層に達する。遺構は、灰オリーブ色泥砂層上で検出した。

南北濠跡 2トレンチ (2T) の調査区東端から 3.2 m 西のところで、暗緑灰色泥土をもつ

南北濠状遺構の東肩口を検出した。東西幅 3.5 m 以上、深さ 0.8 m 以上ある。この濠の東肩口は 9.4 m 南に離れた 1 トレンチ (1 T) では認められなかった。埋土中の遺物は少なく、土師器小片と瓦器椀小片が出土した。

東西濠跡 3 トレンチ (3 T) 中央でオリーブ灰色泥砂の上層に堆積する厚さ 25 cm の暗灰黄色砂層を切って成立している幅 3.2 m、深さ 0.8 m 以上ある東西方向の濠跡である。2 T で検出された南北濠跡の延長は、3 T 東端のわずか 25 cm 東を通ることから、これら両濠跡が繋がる可能性は極めて高い。青灰色粘質土、暗緑灰色泥土、灰色粘土を埋土にもつ。この濠跡も遺物は土師器小片のみである

湿地状堆積 1 T 及び 3 T で検出した湿地状堆積で、KBM - 2.0 m でオリーブ灰色泥砂層を切っ



写真 16 3 T 濠状遺構検出状況 (南東から)

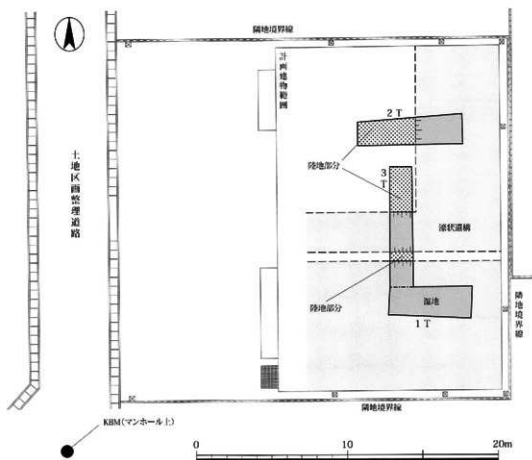
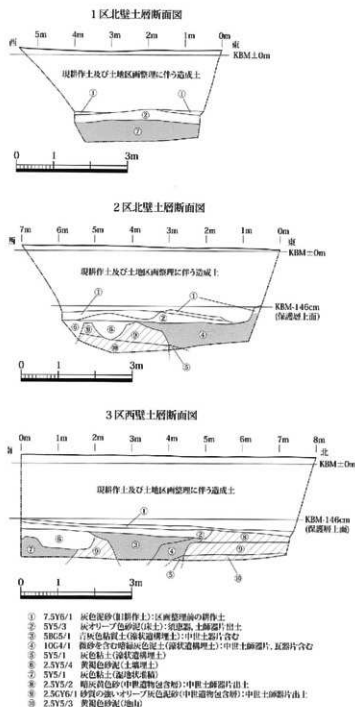


図 34 試掘調査区位置図 (1:250)

て成立していることがわかった。この湿地状堆積は深さ1.4m以上ある。埋土は灰色粘土で、遺物はほとんど見つからない。

他に、二つの濠跡よりも古く、湿地状堆積よりも新しい黄褐色砂泥を埋土とする土壌群が見ついている。



- ① 7.5Y/1 灰色泥砂(非耕作土):区画整理前の耕作土
 ② 5Y5/3 灰オリーブ色砂泥(床土):築造部、土師器片出土
 ③ 5B5/1 灰色粘質土(濠状遺埋埋土):中世土師器片含む
 ④ 10C4/1 黄砂を含む埋積灰色泥土(濠状遺埋埋土):中世土師器片、瓦器片含む
 ⑤ 5Y5/1 灰色粘土(濠状遺埋埋土)
 ⑥ 2.5Y5/4 黄褐色砂泥(土壌埋土)
 ⑦ 5Y5/1 灰色粘土(濠埋土堆積)
 ⑧ 2.5Y5/2 暗灰色粘砂(中世遺物埋積部):中世土師器片出土
 ⑨ 2.5C7/6 砂質の濃いオリーブ灰色泥砂(中世遺物埋積部):中世土師器片出土
 ⑩ 2.5Y5/3 黄褐色砂泥(他物)

※KBM:西側の杭道(区画整理道路)が東西道路と丁字に交わる交差点マンホール

図35 調査区土層断面図(1:100)

3 まとめ

江戸時代の庄屋の子孫である土地所有者によると、当該地は、「向い屋敷」と呼ばれていた土地である。今回検出された東西濠跡と南北濠跡は、この向い屋敷の東と南を西するとともに、南北濠跡と湿地状堆積は下三栖城跡の東限の濠である可能性が高い。

また、大正11年測図、昭和10年修正の京都市土木局都市計画課作成の3000分の1図に残る水路跡と今回の調査成果を基に下三栖城跡の範囲を復元した結果、下三栖遺跡2次及び5次調査で検出された東西濠状遺構は、下三栖城跡の北を限る濠の延長であることがわかった。(馬瀬 智光)

註

- 山下正男『京都市内およびその近辺の中世城郭—復原図と関連資料—』(京都市立大学人文科学研究所 1986年)
- 尾藤徳行・電子正彦「下三栖遺跡」『京都市内遺跡立会調査概報 平成8年度』(京都市文化市民局 1997年)
- 桜井みどり「下三栖遺跡」『平成8年度 京都市埋蔵文化財調査概要』(財)京都市埋蔵文化財研究所 1998年)
- 百瀬正恒「下三栖遺跡」『平成9年

度 京都市埋蔵文化財調査概要』(財)京都市埋蔵文化財研究所 1999年)

- 5) 南出俊彦・小森俊彦 「下三栖遺跡」『平成10年度 京都市埋蔵文化財調査概要』(財)京都市埋蔵文化財研究所 2000年)
- 6) 加納敏二・近藤章子 「下三栖遺跡」『平成11年度 京都市埋蔵文化財調査概要』(財)京都市埋蔵文化財研究所 2002年)

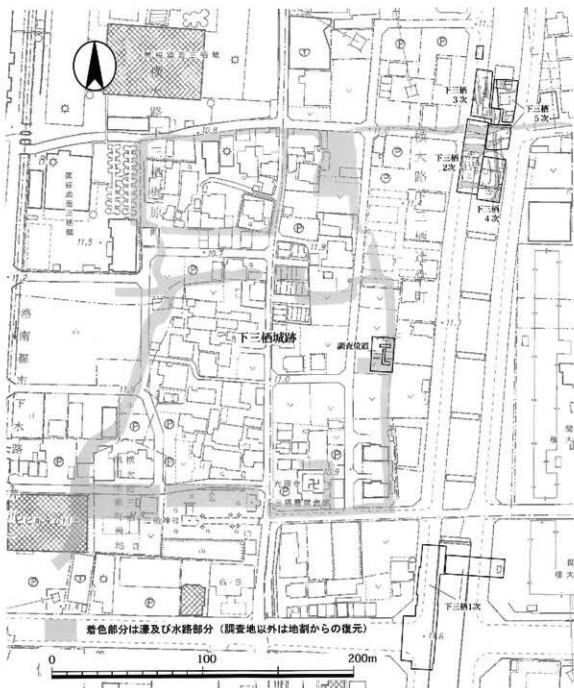


図36 下三栖城跡復元図及び下三栖遺跡調査履歴 (1:2,500)

IV - 8 福西古墳群 No.111

1 はじめに

調査地は西京区大枝東長町 1-214 で、宅地造成が計画されたため 4 月 17 日に試掘調査を実施した。調査前には墳丘と思われる高まりは視認できなかったため、すでに削平された墳丘や石室の検出を目的としたが、調査の結果、現代盛土および旧耕作土の直下が地山であり、古墳の痕跡は一切確認されなかった。

調査地は福西古墳群北群の分布域に位置し、周辺には古墳が点在している。特に柿畑となっている北隣地の東端では墳丘が現存しており、石室石材が露出している。福西古墳群はこれまでも、遺跡地図や調査報告書など複数の刊行物において取り扱われているが、各文献の間で古墳番号が統一されず、1 基の古墳に対して複数の古墳番号が用いられ、さらに、古墳が新規発見される度にいずれかの既刊文献にもとづいて付番されてきた。このような経過のために、群中の古墳を個別に認識することが非常に困難な状況となっていた。そこで、平成 18 年度の京都市遺跡地図改訂を機に各古墳に新たに番号を付け直して古墳番号の統一を図った。

ここでは、今回の試掘調査の報告に際して、遺跡地図改訂に伴って統一した古墳番号と各既刊

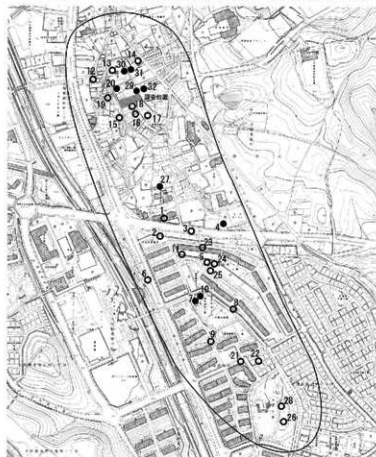
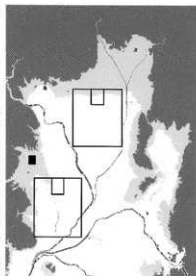


図 37 調査位置図 (1:10,000)

文献における古墳番号との対応関係を明示するとともに、福西古墳群中の各古墳の概要および現状を紹介することとし、遺跡の普及啓蒙ならびに調査研究進展の一助としたい。



2 既往の調査と付番の方法

福西古墳群に関する調査はすでに明治・大正期にみられ、踏査記録として墳丘や石棺、出土遺物などが紹介されている(岩井 1908, 梅原 1914)。この時点で福西古墳群が古墳群としてすでに認識されていたことは重要である。福西古墳群における発掘調査は、1952(昭和 27)年の京都府教育委員会による調査に端を発する。孟宗竹栽培に伴う土取りによって石室が露出したため調査が実施された(藤沢・小野山 1960)。

1962(昭和 37)年に京都府教育委員会より刊行された『京都府遺跡目録 1961』には、福西古墳として 8 基の円墳が遺跡として登録されている(京都府文化財保護課 1962)。その後、高度経済成長により京阪間を結ぶこの地域においても周辺の宅地化、軽工業地化が進み、遺跡へ深刻な被害をもたらすこととなり、この状況を受けて、京都府教育委員会が 1967(昭和 42)年度に向日丘陵周辺に所在する遺跡に対して分布および現状を把握するために分布調査を実施した(堤・高橋 1968)。その結果、福西古墳群として円墳 20 基(一部消滅)と石棺石材 2ヶ所が確認されている。まもなく宅地化の波が福西古墳群にも及ぶこととなり、古墳群の範囲を含む小畑川兩岸に洛西ニュータウン建設が計画された。これに伴って、1970～73(昭和 45～48)年度に京都市によって、開発の影響を受ける福西古墳群の南半部分に分布する古墳に対して発掘調査が実施された(藤岡他 1970・1972・1973a・1973b)。

これと相前後して京都大学考古学研究会は京都市郊外の北西部ならびに西部に分布する古墳群に対して、継続的に分布調査を実施し、墳丘や主体部、出土遺物の資料化を通じて詳細な分析をおこなっている(京都大学考古学研究会 1966・1971)。ここで与えられた評価は、現在もなお嵯峨野や向日丘陵周辺に立地する後期古墳に関する研究の基礎となっている。

その後も現在に至るまで、古墳群範囲の北半部にあたる旧集落内で宅地化に伴う開発が相次ぎ、調査によって新規発見の古墳も確認されている(吉村 1992, 玉村 1993, 菅田 2006)

そして平成 18 年度には京都市遺跡地図の改訂に伴って、各古墳に新たに番号が付け直され、古墳番号の統一が図られた(京都市文化財保護課編 2007)。まず、各文献に記載された古墳の位置や観察所見、土地所有者に関する記述などにもとづき、既刊の調査報告書や遺跡地図における古墳番号の対応関係を調べた。さらに現地踏査をおこない古墳の現状確認に努めた。

付番作業にあたっては、これまでに調査された福西古墳群のうち、洛西ニュータウン建設に伴って 1971(昭和 46)年度に京都市によって調査された 2 古墳が「福西古墳 7 号墳及び 10 号墳附縄文時代遺物包含層」として京都市史跡に登録されているため、京都市による一連の調査で採用された古墳番号(1～11・23～25)を第一に踏襲するのが適当と判断した。その次に、各文献で用いられた古墳番号の対応関係を整理したうえで、1972(昭和 47)年発行の京都府遺跡地図で用いられていた古墳番号を優先して番号の若い順から欠番(12～22)に流し込む方法を採用し、32 番まで付けるに至った¹⁾。今後、調査で未知の古墳が発見された際は、これに続く順に古墳番号を付けていくこととする。

表2 福西古墳群古墳番号対応表

中 07	第 72	第 89	第 71	調査 年度	墳丘 (m)	埋葬施設	形	出土遺物	備考 (調査概要など)	現状	調査 文献	
1	10	10	11	1970	円墳 (径 1.37)			須恵器	削平されるも径約 1.3m の打土の遺跡あり。	消滅	④	
2	11	11	12	1970					古墳の形状確認できず。	消滅	④	
3	12	12	13	1970					古墳の形状確認できず。	消滅	④	
4	4	18	18	14 2004	円墳 (径 2.3, 高さ 4.5)	横穴式石室 (両廂式, 玄室長 4.5 幅 2.1 奥室長 5.6 幅 1.1)	なし	須恵器, 土師器, 瓦片, 鉄刀, 刀片, 鉄釘	墳丘の一部は京都生保福西支店敷地内に 埋没保存。	保存	④⑤	
5	5	13	13	15	1973				古墳の形状確認できず。調査報告では木 槌立首墳と想定。	消滅	⑦	
6	6	17	—	16	1970	—	—	—	自然埋没の上の現代感上。	—	④	
7	7	14	14	18	1974 (径 1.5, 高さ 2)	竪穴式石室?	木棺?	須恵器	本埋葬施設	保存	⑤	
8	8	—	—	1971	削平	竪穴式?	なし	なし		消滅	⑤	
9	9	—	—	1971	削平・円墳?	なし	石棺石材 (砂岩)	なし	封土の痕跡を確認。石棺石材(砂岩)出土。	消滅	⑤	
10	10	—	22	17	1971	円墳 (径 1.2)		須恵器・土師器	市物探検隊	保存	⑤	
11	11	—	23	—	1971 1972	横穴式?	なし	なし		消滅	③④	
12	—	1	1	3	—	—	—	—		削平	—	
13	—	2	2	2	1952	横穴式石室 (長 3.2 幅 1.0)	組合式木 槌石棺	須恵器・土師器・酒 罎	石棺は京都大学総合博物館に展示。	消滅	③	
14	—	3	3	1	—	—	—	—		削平	—	
15	—	4	4	6	—	—	—	—		削平	—	
16	—	5	5	8	—	—	—	—		削平	—	
17	—	6	6	9	—	—	—	—		削平	—	
18	—	7	7	7	—	—	—	—		削平	—	
19	—	8	8	5	—	—	—	—		削平	—	
20	—	9	9	—	—	埋葬	—	—	敷地北西部に現存。墳丘に斜あり。	現存	—	
21	—	15	—	20	—	—	—	—		消滅	—	
22	—	16	—	19	—	—	—	—		消滅	—	
23	23	—	17	—	1973 ?	横穴式石室 (玄室幅 1.0m)		須恵器, 鉄釘, 釘	地の有基は不明。	消滅	⑦	
24	24	—	19	—	1973 ?	横穴式石室(0.5 × 1.8m)		なし		消滅	⑦	
25	25	—	20	—	1973	—	—	—	自然地形	消滅	①	
26	—	19	—	21	円墳?	—	—	—	墓域内かつて存在か? 現在は詳細不 明。	削平	—	
27	—	20	—	10	円墳?	—	—	—	様式、わずかなのみあり。	現存	—	
28	—	21	21	×印	—	—	—	組合式木 槌石棺 (瓦 葺)	築地西にある石棺	—	—	
29	—	—	—	4	2006	円墳			墳丘に現存。石室一部露出。平成 18 年 度比類墳丘の一部を発掘調査。	現存	③	
30	—	—	—	1991	?	横穴式石室 (両廂式)		玄室未測 査のため 不明	須恵器・鉄釘	平成 3 年度立会調査において新規発見。	保存	⑧
31	—	—	—	1992	?	横穴式石室 (片廂式?)				平成 4 年度立会調査において新規発見。	保存	⑧
32	—	—	—	2006	?	横穴式石室			須恵器・瓦片	平成 18 年度発掘調査において新規発見。	保存	⑧

〔凡例〕 中 07 = 京都市文化財保護課編 2007

第 72 = 藤岡他 1970・1972・1973a・1973b

第 71 = 京都市文化財保護課編 1972

第 89 = 京都市文化財保護課編 1989

京大 71 = 京都大学考古学研究会編 1971

3 福西古墳群の概要と現状

ここでは、各古墳の調査成果および現状を新しく付け直した番号順に調査報告書や現地踏査にもとづいて説明する。ただし、以前の踏査などで墳丘の存在が確認され古墳として認識されていたにもかかわらず、その後削平を受けて、現在では地表観察による位置の特定すら困難になっている古墳も少なくない。したがって、特記すべき内容のある古墳に限って記述することとする。各古墳の詳細については、それぞれの調査報告を参照されたい。

1～3号墳 1970年度調査時点ですでに削平されていた。各古墳の推定地点においてトレンチ

調査を行った結果、1号墳推定地において、径約13mの封土の痕跡が認められた。その痕跡の中央付近には石材が散布し、南端では須恵器が集中して出土しており、古墳である蓋然性が高い。2号墳および3号墳両推定地については、土器の散布は認められるものの、古墳の痕跡と思われる遺構は検出されなかった。

4号墳 復元される墳丘規模や横穴式石室の規模が他の古墳に比べて大きく、出土遺物には須恵器のほか、馬具や鉄刀などが含まれていることから、福西古墳群の中でも相対的に有力者が葬られた古墳と推定される。現在、京都生活協同組合洛西支店の駐車場に石室および墳丘の一部が保存されている(写真17)。

5号墳 すでに開墾によって削平されていたが、古墳の位置と規模を確認するためにトレンチ調査がおこなわれた。結果、須恵器と鈿の出土をみたものの古墳の痕跡は認められなかった。土地所有者からの聞き取りにより、径約13mで高さ約1.2mの円墳が推定され、さらに石材が出土しなかったことから木棺直葬墳と想定されているが、詳細は不明である。

6号墳(地点) 小畑川左岸に位置する径約20m、高さ約3mの円墳状の高まりであったが、試掘調査の結果、自然堤防上に瓦礫などを人為的に積み上げた現代盛土であることが判明した。

7号墳 開墾によって墳丘は攪乱されていたが、墓坑や礫床、排水溝と想定される遺構が検出された。墓坑底に設けられた礫床の範囲から、木棺による埋葬が推定されている。

墓坑は縄文時代遺物包含層をも掘り込んで成形されたため、押型文土器やサヌカイト剥片、石鏃などが出土している。7号墳は10号墳とともに「福西古墳7号墳及び10号墳附縄文時代遺物包含層」として1983(昭和58)年6月に京都市史跡に登録され、福西遺跡公園の一面に保存されている(写真18)。

8号墳 墳丘自体はすでに削平されていたが、断面U字形の掘方に拳大～人頭大の礫を充填した南北方向の溝(長4m)が検出され、横穴式石室に伴う排水溝と推定されている。

9号墳 耕作等によって墳丘は削平されているものの、封土の痕跡が確認されている。石棺石材片(砂岩)が出土したという。

10号墳 無袖式横穴式石室で、須恵器と土師器が出土している。墳丘は径約12mの円墳と推定されている。10号墳は7号墳とともに京都市史跡に登録され、福西遺跡公園の一面に保存され



写真17 4号墳(南から)



写真18 7・10号墳(東から)

ており、石室の見学が可能である。

11号墳 開墾により墳丘の大半が失われており、わずかに残った裾部の平面形から帆立貝式古墳の可能性も指摘されているが、詳細は明らかでない。石室は確認されなかったが、墓坑や礎床、排水溝と考えられる遺構が検出された。

13号墳 1952年度に緊急に発掘調査された古墳で、退化した無袖の横穴式石室に組合式家形石棺が納められていた。棺内および棺外からは後世の土師器と須恵器が出土した。石棺は移築され、現在、京都大学総合博物館に展示されている。

20号墳 未調査の古墳である。敷地の北西一面にコンクリートブロックで囲われて現存しており、墳頂には祠が祀られている（写真19）。

23号墳 礎敷を伴った横穴式石室が検出され、石室からは須恵器、耳環、鉄釘が出土した。

24号墳 退化した小型の横穴式石室が検出された。

25号墳（地点） 若干の起伏が認められたため、試掘調査がおこなわれた。その結果、自然地形であることが判明した。

26号墳 ニュータウン建設に伴って整備された福西公園の東隣に所在する。古くから共同墓地として利用されていた場所で、ニュータウン建設前は舌状にのびる低丘陵を呈していた。この墓地に高さ2～3m、径12mほどの円丘状の高まりがあったとされるが、現在、コンクリートブロック塀で囲まれた墓地内およびその周囲に顕著な高まりは認められず、すでに削平された可能性が考えられる。

27号墳 現在、柿畑となっている敷地の南端でわずかに盛り上がった墳丘の痕跡が認められるが、詳細は不明である。

28号墳（地点） 26号墳が所在する共同墓地付近に位置する。1952年度の調査報告において石棺出土地として地図に「×」印が付けられ、『京大71』の古墳分布図でもそれが踏襲されている。その後、『府72』刊行以降は古墳として扱われ現在に至っている。石棺は組合式家形石棺の底石で、当時墓地へ埋葬する直前におこなう儀式の際に棺を置く棺台として使用されており（藤沢・小野山1960）、現在も墓地の西側通路脇に横たわっている（写真20）。

29号墳 平成18年度の発掘調査で、墳丘が敷地をまたぐため墳丘の一部が調査対象となった。



写真19 20号墳（西から）



写真20 28号地点石棺底石

石室を含む大部分は柿畑内に現存している。現在、天井石と思われる石室石材が地表面から2石露出しており、南方向に開口する横穴式石室と推定される（写真21）。調査の結果、径約22mの円墳と復元されている。



写真21 29号墳（南から）

この墳丘は『府72』でも分布図の位置からみて6号墳として認識されていた可能性も考えられたが、他古墳との位置関係や各目録に記載された内容の対応関係を照合した結果、『府72』の6号墳は『京大71』の9号墳に相当することが判明した（京考研1966）。

30号墳 平成3年度の立会調査において新たに発見され、羨道を中心に発掘調査が実施されている。玄室の大半は北隣接地内にあるため未調査である。横穴式石室は1段ないし2段分が残存しており、羨道幅は約1.1mを測る。床面からは須恵器などが出土した。なお、石室は北隣接地へつづく玄室部分も含めて地中保存されている。

31号墳 平成4年度の試掘調査で新たに発見された。発掘調査はおこなわれていないため詳細は明らかでないが、横穴式石室が確認され、玄室幅1.2m、玄室長3.0m、残存高0.45mと推定される。なお、試掘調査後の協議の結果、計画建物基礎の設計変更が図られ、石室は地中に保存されている。

32号墳 平成18年度の発掘調査で新たに発見された削平古墳で、隣接して築かれた29号墳の周溝の一部を埋め立てて墳丘が構築されたことがわかった。横穴式石室の最下段を検出、石室からは須恵器が出土し、遺構に伴わないが土師質亀甲形陶棺片も出土した。石室については、計画建物の配置変更によって地中保存されている。

4 おわりに

福西古墳群は旧山除道の南方、向日丘陵の東を南流する小畑川左岸の河岸段丘上に立地する古墳時代後期の古墳群で、乙訓地域を代表する群集墳として位置づけられる。築造時期は出土遺物から6世紀後葉～7世紀中葉におさまるものと推定され、被葬者については、竜山石製組合式家形石棺の分布から石棺製作を職掌とした石作氏との関連も指摘されている（京考研1971、河野1998）。また、32号墳の発掘調査で出土した土師質亀甲形陶棺も類例は少ないが、被葬者の性格を考える上で注目される。

福西古墳群は、古くは長野新田の開墾、近年ではニュータウン建設と幾度となく開発の影響を受けてきた遺跡で、墳丘が現存する古墳は非常に少なく、もはや古墳群の全体像を把握するのが非常に困難な状況になっている。実施された主な発掘調査は1970年代と古く、当時の調査の緊急性等を勘案すれば、調査報告書の成果は慎重に扱われる必要があることを付記しておきたい。

（宇野 隆志）

註

1) そもそも京都市の調査で用いられた古墳番号は、ニュータウン建設の計画を受けて京都市が行った周辺の分布調査を通して、計画の影響が及ぶ可能性のある範囲（小畑川南岸）に位置する25の古墳に対して付番されたものである。その後、一部の古墳がニュータウンの計画範囲外であるために調査対象から除外された結果、調査古墳に欠番が生じたようである。ちなみに欠番になっている12～22号墳には向日丘陵西側斜面に所在する東山古墳群の一部や、ニュータウンの南で小畑川右岸に位置する鏡山古墳や石見上里古墳、大道古墳などがあてられていた。

《調査報告》（表2の調査文献に対応）

- ① 岩井登堂 1908 「山城國葛野乙訓兩部の古墳二三」『考古界』第7篇第2號 考古學會
- ② 梅原末治 1914 「山城の古墳篇」『人類学雑誌』第29卷第12号 日本人類学会
- ③ 藤沢長治・小野山節 1960 「京都大枝福西古墳」『京都市文化財調査報告』第22冊 京都市教育委員会
- ④ 藤岡謙二郎他 1970 「洛西ニュータウン地域の歴史地理学的調査—福西古墳群の発掘調査報告—」京都市都市開発局洛西開発室
- ⑤ 藤岡謙二郎他 1972 「洛西ニュータウン地域の歴史地理学的調査—発掘と歴史的景観・土地利用の変遷に関する調査報告—」京都市都市開発局洛西開発室
- ⑥ 藤岡謙二郎他 1973a 「洛西ニュータウン地域の歴史地理学的調査—発掘と歴史的景観・土地利用の変遷に関する調査報告—補遺編」京都市都市開発局洛西開発室
- ⑦ 藤岡謙二郎他 1973b 「洛西ニュータウン地域の歴史地理学的調査—補遺編その2—」京都市都市開発局洛西開発室
- ⑧ 古村正親 1992 「福西22号墳（90MK10）」『京都市内遺跡立会調査概報 平成3年度』京都市文化観光局
- ⑨ 玉村登志夫 1993 「福西28号墳 No.68」『京都市内遺跡試掘調査概報 平成4年度』京都市文化観光局
- ⑩ 北田栄造 2005 「福西4号墳 No.93」『京都市内遺跡試掘調査概報 平成16年度』京都市文化市民局
- ⑪ 菅田薫 2006 「福西古墳群」京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2006-5（財）京都市埋蔵文化財研究所

《参考文献》

- 河野一隆 1998 「福西2号墳」『京都市埋蔵文化財情報』第69号（財）京都市埋蔵文化財調査研究センター
京都市文化財保護課（編）2007 「京都市遺跡地図台帳 第8版」京都市文化市民局
京都大学考古学研究会（編）1966 「第17とれんち〈別冊I〉」
京都大学考古学研究会（編）1971 「嵯峨野の古墳時代—御堂ヶ池群集墳発掘調査報告—」
京都府文化財保護課（編）1962 「京都府遺跡目録 1961」京都府教育委員会
京都府文化財保護課（編）1972 「京都府遺跡地図 第4分冊」京都府教育委員会
京都府文化財保護課（編）1989 「京都府遺跡地図 第4分冊〔第2版〕」京都府教育委員会
京都府文化財保護課（編）2004 「京都府遺跡地図 第4分冊〔第3版〕」京都府教育委員会

- 堤圭三郎・高橋美久二 1968「向日丘陵地周辺遺跡分布調査概要」『埋蔵文化財発掘調査概報（1968）』京都府教育委員会
- 松崎俊郎 1991「乙訓地域の家形石棺集成」『平成2年度 財団法人向日市埋蔵文化財センター年報 都城』3
（財）向日市埋蔵文化財センター
- 丸川義広 1992「福西古墳群と大枝山古墳群—京都市の西郊に営まれた二つの群集墳について—」『長岡京古文化論叢Ⅱ』三星出版

IV - 9 中久世遺跡 No. 113



図38 調査位置図 (1:5,000)

1 はじめに

調査地は国道171号線と西国街道の交差点(久世殿城)を400mほど西に入った北側、南区久世中久世4丁目33であり、中久世遺跡の中央やや西寄りに該当する。

中久世遺跡は、長岡京跡左京域のすぐ北に位置する、桂川右岸において弥生時代から室町時代に至る長期間にわたって営まれた集落遺跡で、これまでの調査でも南東に隣接する大藪遺跡も含めて、南東方向へ流れる旧流路を囲むように各時代の遺構が検出され、その成果が非常に注目されている。

調査地の近隣では、平成11年度に西側隣接地で実施された発掘調査で、弥生時代の方形周溝墓、古墳時代の竪穴住居跡、飛鳥～奈良時代の掘立柱建物群、平安時代の井戸等数多くの遺構が耕作土直下で検出されている¹⁾。

今回、ここに工場の建て替え計画が立てられたため、遺構の残存状況を確認することを目的として試掘調査を実施することとなった。調査は工場建設の工期に合わせて、6月7日と11月14日の2回に分けて実施した。調査面積は合計で74㎡である。

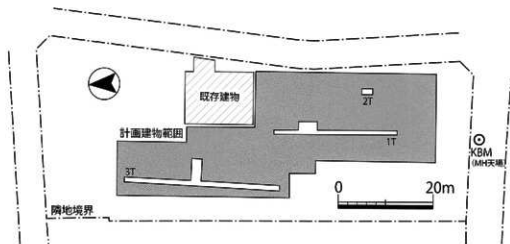


図39 調査区位置図 (1:800)

2 層位と遺構

調査区内では旧建物の基礎が深くまで及んでおらず、遺構面が良好な状態で遺存していた。基本層序について述べれば、現代盛土(①層)、旧耕作土および床土(②・③層)の下に第1遺構面が存在する。遺構面は⑧層上面で、弥生土器の小片を含む包含層で、非常に安定した黄褐色砂泥である。さらに、その下層の⑩層上面でも遺構が存在し(第2遺構面)、これらの遺構面は灰色泥土の無遺物層(⑩~⑫層)の上に成立していた。遺構面のレベルは、調査地南の西国街道上に設けられたマンホールを仮ベンチマーク(KBM)とすると、第1遺構面がKBM-0.8~1.0m、第2遺構面がKBM-1.1~1.25mを測る。

1トレンチ(1T) 遺構は第1面で平安時代の土壌1基、第2面で弥生時代の土壌状あるいは溝状遺構を検出した。土壌は平面円形で深さは検出面から約30cmを測り、須恵器などが出土した。弥生時代の遺構は検出面が小さく平面形を捉えきれなかったため、その性格は不明であるが厚さ約20cmの埋土からは弥生土器片が多く出土した。竪穴住居の可能性も想定される。

2トレンチ(2T) 1Tの東に設けた2Tの層序は、床土までは1Tと同様であるが、それ以下は異なる。⑧層は砂混じりの泥上で、弥生時代から平安時代の遺物を含む。遺物はいずれも角のど

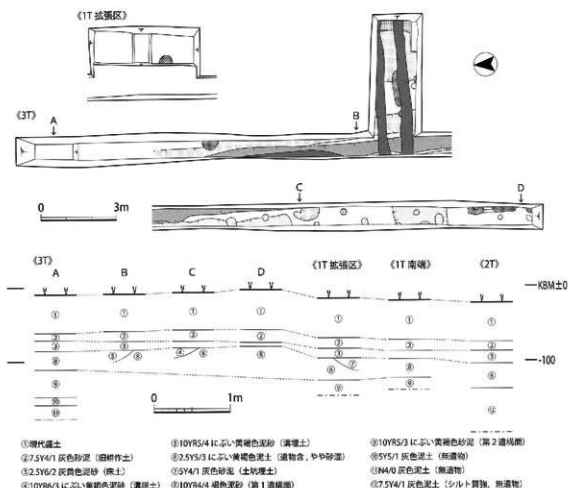


図40 調査区平面図(1:150)・断面柱状図(1:50)



写真22 3トレンチ拡張区全景（北西から）

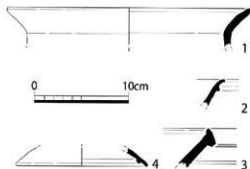


図41 遺物実測図（1：4）

れた小片であり、⑥層は流路状あるいは湿地状遺構の埋土と考えられる。

3トレンチ（3T） 第1遺構面で遺構精査をおこなった結果、柱穴・溝・土壌などの遺構が認められ、切り合い関係から少なくとも4時期にわたる遺構の変遷が明らかになった。各遺構の時期などについては不明であるが、長岡京期あるいは平安期の掘立柱建物などが建てられたのち、中世に入って耕地化したと推定される。また、調査区内の3箇所で第一遺構面を掘り下げたところ、下層で成立する遺構を確認した。

3 出土遺物

遺物は遺構検出時に各遺構および包含層から出土したが、すべて小破片である。耕作などで本来の遺構から切り離された遺物が多いが、図化し得たものを挙げておく。

土師器（1） 甕の口縁部で、ほぼまっすぐに立ち上がった胴部から屈曲して大きく広がる。

須恵器（2～4） 2は甕の口縁部で、口縁部直下に凸線がめぐる。3は大型の甕の口縁部で、口径は40cm前後に復元される。4は蓋である。

4 まとめ

調査の結果、調査地内において中久世遺跡に関連する遺構が、旧耕作上層および床土層の直下で良好に遺存していることが明らかとなった。試掘調査のため、遺構の性格などの詳細については言及できないが、検出した遺構は弥生時代から中世以降に及ぶものと推定され、西隣接地で検出された一連の遺構群が調査地内にも展開していることが明らかになった。

なお、今回の調査で検出した遺構は、調査後の協議の結果、基礎掘削深度が変更され地中保存が図られている。

（宇野 隆志）

註

1) 出1 勲2000「中久世遺跡」『京都市内遺跡発掘調査概報 平成11年度』京都市文化市民局

V 試掘調査一覧表

V 試掘調査一覧表

平成18年度 1月～3月

平安京左京地区

番号	遺跡名	所在地	調査日	調査概要	調査面積	受付番号
1	北辺三坊三町跡	上京区中立売通室町西入1丁目466-2	1/17	GL-1.1m以下で、縄文期以前の遺構面を3層確認。 発掘調査を指導する。	49㎡	06H541
2	三条三坊十町跡	中京区兩替町通御池上る金炊町453-1	3/13	GL-0.8m以下、近世初頭以前の遺構が4層以上良好に残存する。 発掘調査を指導。	33㎡	06H722
3	四条一坊十二町跡	中京区壬生坊城町5他12築	1/25	GL-1.04mで中世の池状遺構。 発掘調査を指導。	22㎡	06H568
4	四条三坊十四町跡	中京区東洞院通錦小路上る元竹田町631-2	2/2	GL-1.8m(KBM-1.40m)で中世の土壁1基を検出した他は近世擾乱。設計変更と将来の再試掘を指導。	26㎡	06H185
5	四条四坊十町跡	中京区宮小路六角下る大黒町(旧生祥小学校)	1/24	GL-2.0mで中世遺構面。その他、近世の地下室及び不明石積遺構を検出。設計変更を指導。	22㎡	06H880
6	四条四坊十一町跡	中京区柳馬場通朝業師下る十文字町444他	3/1	GL-1.3mで中世に遡る可能性のある土壁2基を検出。 発掘調査を指導。	15㎡	06H365
7	五条一坊六町跡	中京区壬生相合町79他	3/7	GL-0.7mで、中世に遡る土壁を多数確認。	58㎡	06H641

平安京右京地区

番号	遺跡名	所在地	調査日	調査概要	調査面積	受付番号
8	北辺四坊一町跡	右京区花園猪ノ毛町10-1他15築	2/5, 6	GL-0.7m以下、宇多川支流の氾濫堆積。	74㎡	06H586
9	一条二坊四町跡	中京区西ノ京鹿垣町1-36他	2/19, 3/14	GL-0.8m以下で中世以前の遺構。 発掘調査を指導する。	113㎡	06H596
10	三条二坊十四町跡・西ノ京遺跡	中京区西ノ京下合町4-1, 4-3	2/13	GL-1.08mで地山。中世耕作溝のみ。	29㎡	06H572
11	七条三坊五町跡・六町跡	右京区西京極大門町1-1, 1-2, 2, 36-1, 36-2, 中溝町2-2, 2-5	1/29	3箇所(1)の調査区を設定。1Tr.で平安の包含層。2Tr.は氾濫堆積。3Tr.は安定地盤だが遺構面は既に削平されている。	106㎡	06H618
12	八条二坊九町跡・衣田町遺跡	下京区西七条南衣田町93	1/31	GL-約0.35mで中世整地層、その下層で旧流路を確認。	21㎡	06H585
13	朱雀大路跡(九条一坊四町東)	南区唐橋高田町58-4, 58-5	3/8	調査区東端、GL-1.2mで鍋取川の氾濫堆積を確認。	16㎡	06H634
14	九条大路跡(九条一坊十三町南)・唐橋遺跡	南区唐橋川久保町18	2/28	GL-0.6mで南北溝3条、-0.7mで集石遺構、ただし、擾乱多し。 本文10頁。	37㎡	06H679
15	九条二坊九町跡	下京区御所ノ内南町83	2/8	GL-1.5mで地山確認。湿地状堆積顕著。	15㎡	06H588

洛北地区

番号	遺跡名	所在地	調査日	調査概要	調査面積	受付番号
16	船山須惠器窯跡	北区西賀茂今原町9-1	1/11	調査区において、KBM-3.1m前後で旧表土を確認。	7㎡	06S510
17	本山古墳群	左京区岩倉橋枝町333-3他	3/26, 27	調査地北端において、古墳2基を確認。東端のマウンドは現代盛土。 本文14頁。	82㎡	06S645

太秦地区

番号	遺跡名	所在地	調査日	調査概要	調査面積	受付番号
18	仁和寺院家跡	右京区常盤古御所町9-5他	2/26	既存建物の影響が大きいが、一部で溝1条及び土壁1基を検出。	25㎡	06S632

洛東地区

番号	遺跡名	所在地	調査日	調査概要	調査面積	受付番号
19	中臣遺跡	山科区栗柄野狐塚町	1/9	GL-0.26mで時期不明の石敷遺構1。	31㎡	06N508
20	中臣遺跡	山科区栗柄野打越町36-3	2/21	GL-1.0～1.5mで地山確認。	28㎡	06N593

V 試掘調査一覧表

鳥羽地区

番号	遺跡名	所在地	調査日	調査概要	調査面積	受付番号
21	鳥羽離宮跡	伏見区中島秋ノ山町54-1	1/10	GL-0.69mまで掘削するが、全て近代以降の盛土。	7㎡	06T516

伏見・醍醐地区

番号	遺跡名	所在地	調査日	調査概要	調査面積	受付番号
22	醍醐古墳群	伏見区醍醐内ヶ井戸20-1 他	1/4, 5	16号墳の石室のみ残存。他は造成時に削平されている。	64㎡	06S571

長岡京地区

番号	遺跡名	所在地	調査日	調査概要	調査面積	受付番号
23	左京九条二坊七町・八町跡	伏見区淀水通町733-1	3/28	GL-1.7m以下で2m以上の湿地状堆積を確認。	14㎡	06NG692
24	右京二条三坊一町跡	西京区大原野上里鳥見町	3/22	GL-0.25m以下、河川の氾濫堆積。	63㎡	99NG424

南・桂地区

番号	遺跡名	所在地	調査日	調査概要	調査面積	受付番号
25	史跡名勝嵐山・嵐山谷ヶ辻子町遺跡	西京区嵐山上海道町24-13の一部	3/9	江戸時代後期以降の石垣を現行道路の西約2.7mで検出。	10㎡	18N065
26	史跡名勝嵐山	西京区嵐山上海道町22-5	3/20	GL-0.65mで15世紀頃の土壌検出。	8㎡	18N048
27	大藪遺跡	南区久世城町527-1, 528-1, 814-3	1/15	GL-0.2mで中世の溝・柱穴、弥生時代の堅穴住居址を検出。発掘調査を指導。	24㎡	06S522

平成19年度4月～12月

平安宮地区

番号	遺跡名	所在地	調査日	調査概要	調査面積	受付番号
28	大極殿北廊跡	上京区千本通下立売下る小山町875-1	10/18	GL-0.3m以下、湿地状の堆積。敷地東端で、地山の暗褐色粗砂層を確認。	10㎡	07K342
29	明徳堂院 明礼堂・東回廊跡	上京区千本二条下る聚楽町863-5, 863-55, 863-57	8/27	GL-1.3m～1.4mの地山直上まで現代の擾乱。遺構なし。	11㎡	07K238
30	聚楽院跡	中京区聚楽廻中町59-1他3筆・聚楽廻西町136-7他3筆	8/8	瓦溜め土壌を1基確認。	32㎡	07K079
31	右馬寮跡	中京区西ノ京右馬寮町10-1	5/18	GL-1.54mで砂礫の地山。遺構なし。	18㎡	07K038
32	侍従厨跡・史跡旧二条離宮(二条城)	中京区二条通堀川西入る二条城町541	5/21	寛永時の盛土層上面で、礎石状石、大量の瓦片を含む東西溝などを検出。設計変更を指導。	36㎡	18N074

平安京左京地区

番号	遺跡名	所在地	調査日	調査概要	調査面積	受付番号
33	一条大路(北辺三坊五町北・上京御所内藤町遺跡)	上京区一条通鳥丸西入る広橋殿町400	8/1	近世の土坑と中世の遺構面 (GL-1.2m) を確認。設計変更を指導。	15㎡	07H133
34	二条三坊三町跡	中京区釜煎通竹屋町下る亀屋町330, 334-1, 334-3	5/30	GL-1.5mで遺構検出面。中世以前に遡る溝、土壌等確認。擾乱著しい。	48㎡	07H022
35	三条一坊十四町跡	中京区姉崎町(旧教業小学校)	10/22, 23	1Tr.で神泉苑に關わる池状の堆積をGL-0.93mで検出。発掘調査を指導。	148㎡	07H264
36	三条三坊十町跡・鳥丸御池遺跡・二条殿御池城跡	中京区両替町御池上る龍池町449-1	4/11, 12	GL-1.5mで押小路殿の園池に關わる落ち込み屑口を検出。本文3頁。	32㎡	06H592
37	東京極大路跡(三条四坊十五町跡)	中京区上本能寺前町486-2, 602-2	10/9	GL-1.35mで鎌倉末～室町前期の土壌3基を検出。	37㎡	07H234
38	四条一坊一町跡	中京区壬生朱雀町1-2	6/22	GL-1.1mで三条大路南側溝の可能性のある溝状遺構を検出。	28㎡	07H072
39	四条一坊一町跡	中京区壬生朱雀町5-2, 5-5	10/31	調査地西半において平安期の池跡を確認。試掘調査の延長を指導。	63㎡	07H239

40	四条二坊十五町跡・本能寺城跡	中京区西洞院通六角下る地須町412, 412-1	6/6	GL-1.0mで中世焼瓦と炭の堆積層, -1.8mで池状地積を確認。発掘調査を指導。	44㎡	07H043
41	四条三坊五町跡・烏丸綾小路遺跡	中京区室町通錦小路下る菊水鉦町570他	4/5	GL-0.6mで中世遺物包含層を確認。発掘調査を指導。	30㎡	06H643
42	四条四坊九町跡	中京区柳馬場通三条下る植屋町84-2	5/15	GL-1.4mで江戸前期の遺構面。茶陶類を包含する土壌6基を検出。本文7頁。	28㎡	06H683
43	五条一坊十四町跡	下京区大宮通仏光寺下る五坊大宮町75-1他	12/13	平安時代や中世の土坑やピットを確認。発掘調査を指導。	43㎡	07H350
44	五条三坊一町跡	下京区四条通西洞院東入郭巨山町8他	11/21	3Tr.のGL-0.4mで中世の遺構を検出。1・2Tr.は近世の廃棄土坑により残りが悪い。発掘調査を指導。	60㎡	07H368
45	五条三坊二町跡・烏丸綾小路遺跡	下京区西洞院通綾小路下る綾西洞院町(綾西公園)	10/29	現代盛土直下 GL-1.5m前後で砂礫の地山を確認。	14㎡	07H146
46	五条三坊十一町跡・烏丸綾小路遺跡	下京区仏光寺通室町東入釘廻町247	4/4, 9/19	GL-0.95mで室町時代の遺構面。平安時代後期から室町時代の遺構を多数検出。発掘調査を指導。	63㎡	06H699
47	六条二坊一町跡	下京区大宮通松原下る東側西門前町408-2, 431-1	12/17	GL-0.75mで溝を, また, GL-0.85mで整地層を検出し, 溝やピットなどの遺構が残存していた。発掘調査を指導。	55㎡	07H369
48	七条四坊四町跡	下京区下津敷屋町通間之町東入東玉町296(旧皆山中学校)	10/11, 12	GL-0.5mで南北方向の近世石組溝。その下層で中世柱穴など。発掘調査を指導。	60㎡	07H245
49	八条四坊十二町跡	下京区西之町111他	12/5	GL-1.1~1.3mで地山。江戸中期初頭の銚子関連土壌1。	12㎡	07H373
50	九条三坊九町跡・烏丸町遺跡	南区東九条上殿町47	5/23, 7/12	GL-0.65m以下, 中世以前の可能性のある遺物包含層, 同0.9mで砂礫の地山。	58㎡	07H020
51	九条四坊十四町跡	南区東九条南河原町13-3	4/16	GL-1.15m以下, 鴨川, 高瀬川西河川の氾濫堆積。	7㎡	07H009
52	九条大路(九条三坊十二町南)・烏丸町遺跡	南区東九条南烏丸町24・25・26・27-1・28-1・29・30・31	12/10, 11	GL-0.6m~1.0mで地山確認。近世の土取り穴が顕著。	152㎡	07H346

平安京右京地区

番号	遺跡名	所在地	調査日	調査概要	調査面積	受付番号
53	一条二坊二町跡	上京区御前通西裏上ノ下立先上る北町553他	9/5	GL-1.0m~1.3mで地山を確認。	91㎡	07H233
54	一条二坊四町跡	上京区御前通下立先下る下之町415-2・3, 420, 420-1, 415-1の一部, 中京区西ノ京鹿塚町2	11/7, 12/14	GL-1.3mの地山上で西大宮川・土壌・柱穴・溝などを検出。発掘調査を指導。	45㎡	07H272
55	一条四坊六町跡	右京区花園寺ノ前町76-1, 18	8/6	平安末期の土器溜り1基を確認。	39㎡	07H216
56	三条三坊三町跡・西ノ京遺跡	中京区西ノ京桑原町1	8/23, 24	GL-0.85m以下で平安時代の圓池もしくは備溝埋土を検出。	15㎡	07H250
57	三条三坊四町跡・西ノ京遺跡	中京区西ノ京桑原町1	8/24	GL-1.7mで平安時代の遺構面が残存する可能性大。発掘調査を指導。	3㎡	07H251
58	三条三坊六町跡・西ノ京遺跡	中京区西ノ京桑原町1	4/23	GL-1.97mで黄褐色粘土の地山。設計変更を指導。	116㎡	06H577
59	四條一坊二町跡・朱雀大路跡	中京区壬生朱雀町31-2, 32, 38-8	8/13	GL-0.89mで砂礫の地山。遺構無し。	49㎡	07H199
60	四條三坊十四町跡・山ノ内遺跡	右京区山ノ内赤山町(山ノ内赤山公園)	11/12	GL-0.7m以下, 中世, 平安, 弥生時代の整地層, 遺構等が良好に残存する。発掘調査を指導。	34㎡	07H147
61	五条一坊十六町跡	中京区壬生森前町16-21	4/27	GL-0.65mで砂礫の地山。顕著な遺構なし。	33㎡	06H741・07H061
62	五条二坊七町跡	中京区壬生土居ノ内町16	6/15	GL-0.57m~0.8mで砂礫の地山。遺構面は既に削平されている。	27㎡	07H068
63	五条三坊二町跡	右京区西院矢掛町29番地, 29-2, 30	7/25	GL-1.2mで平安中期~室町時代前期の溝, 柱穴等を確認。設計変更を指導。	25㎡	07H184
64	五条四坊三町跡・西京極遺跡	右京区西院日照町75	5/9	湿地状堆積及び河川堆積を確認。	49㎡	07H057

V 試験調査一覧表

65	五条四坊六町跡・西京極遺跡	右京区西院安塚町100	10/16	GL-1.4mで堅穴住居2棟、掘立柱建物等を検出。 発掘調査を指導する。	63㎡	07H280
66	六条二坊九町跡	右京区西院高田町29, 28の一部	5/25	GL-0.52mで東西溝1条と遺物包含層。GL-0.75mで地山。	34㎡	07H001
67	六条四坊十町跡・西京極遺跡	右京区西院月双町92	6/14	旧耕作土以下、湿地状堆積。	16㎡	06H754
68	六条四坊十二町跡	右京区西京極東大丸町9-1, 9-2, 10-1, 10-2	7/30	東から西へ傾斜化していく土層の傾斜を確認。	28㎡	07H165
69	七条三坊十六町跡	右京区西京極豆田町18	7/9	GL-0.9mで耕作溝2条、-1.35mで砂礫の地山を確認。	22㎡	07H091
70	七条四坊二町跡	右京区西京極町ノ坪町3	9/10	花園通歩道高-1.27m以下、無遺物の湿地堆積。	11㎡	07H253
71	八条一坊二町・六町・七町跡	下京区西七条東久保町55, 梅小路東町83	7/2, 3	GL-0.3m~0.5mで八条坊間小路北側溝と考えられる堆積層を確認。	102㎡	07H101
72	八条一坊六町跡	下京区梅小路東町83-2, 西七条東久保町55-57(一部)	9/3	溝、土壌、ピットを検出するも、遺構密度は希薄。	92㎡	07H217
73	八条二坊九町跡・衣田町遺跡	下京区西七条南衣田町86	10/5	GL-1.2mで湿地状堆積を確認。	29㎡	07H302
74	八条二坊十二町跡	下京区七条御所ノ内本町94	6/11	敷地のほぼ全城が、GL-2.0m~2.6mの地山直上まで攪乱。	35㎡	07H058
75	九条四坊一町跡	南区吉祥院宮の東町	12/26	GL-1.25m以下、旧河川の痕跡。平安京跡に関連する遺構、遺物なし。	89㎡	07H426
76	九条四坊十三町跡	南区吉祥院堤外町11, 14	5/28	GL-0.8m~2.0mで細砂、それ以下は砂礫の河川堆積を確認。	25㎡	07H014

洛北地区

番号	遺跡名	所在地	調査日	調査概要	調査面積	受付番号
77	妙満寺窯跡	左京区岩倉幡枝町743-28, 743-29, 1215-3, 1215-6	6/13	GL-1.45mで灰原と思われる炭層を確認。 発掘調査を指導。	38㎡	07S056
78	植物園北遺跡	北区上賀茂豊田町26, 39	10/3	平安時代の土壌・柱穴・ピットを確認。 発掘調査を指導。	76㎡	07S328
79	上京遺跡	上京区新町通上御堂前通上る東入岩栖院町59他	8/14, 15	GL-1.1mで黒ボク又は砂礫の地山。室町後期の土壌を確認するも、密度は希薄。	78㎡	07S200

太秦地区

番号	遺跡名	所在地	調査日	調査概要	調査面積	受付番号
80	史跡名勝嵐山	右京区嵯峨天龍寺芒ノ馬場町3-16, 3-64, 3-33の一部	12/4	敷地東辺付近ではGL-0.6mで中世遺構面。北辺東半は大部分が攪乱。	8㎡	19N041
81	御所ノ内町遺跡	右京区太秦御所ノ内町22, 25-1	8/20	GL-0.8mで平安時代の南北溝1条を検出。設計変更を指導。本文17頁。	61㎡	07S202

北白川地区

番号	遺跡名	所在地	調査日	調査概要	調査面積	受付番号
82	修学院遺跡	左京区修学院檜峠町11-18, 11-19, 35-4, 47-4, 修学院守押塚9-5, 9-6	8/22	GL-1.2m~1.7m以下で風化花崗岩の砂質土。遺構・遺物なし。	19㎡	07S194
83	吉田神社境内・吉田山遺跡	左京区吉田上大路町36(吉田神社境内)	11/26	西に傾斜する地山を確認。遺構はなし。	41㎡	07S124
84	六勝寺跡(法勝寺跡)・圓崎遺跡	左京区岡崎南御所町10, 10-4, 9-4, 9-15, 9-26, 9-6	6/27	GL-0.85mで平安後期の瓦片を多く含む溝1条、柱穴3基を検出。 発掘調査を指導。	17㎡	07R098
85	六勝寺跡(法勝寺跡)・圓崎遺跡	左京区岡崎天王町70他	9/27	礫及び瓦を含む土壌1基と中世整地層を確認。 発掘調査を指導。	22㎡	07R276

洛東地区

番号	遺跡名	所在地	調査日	調査概要	調査面積	受付番号
86	珍皇寺旧境内	東山区大和大路通四条下る四丁目小松町11-8地	4/9	窯業生産に関連する近現代の焼成遺構を確認。	59㎡	06S715
87	方広寺跡・六波羅政庁跡・法住寺殿跡	東山区茶屋町527(京都国立博物館)	11/5, 6	GL-0.75mで地山。土壌1, 焼けた大仏瓦を含む南北溝1。	58㎡	07S340
88	山科本願寺跡	山科区西野広見町5-7	9/25	調査区南端で堀跡の北肩, GL-0.5m~0.7mで遺構面を検出した。本文25頁。	28㎡	07S274
89	山科本願寺跡	山科区西野広見町5-10	9/25	調査区南端で堀跡の北肩, GL-0.6mで遺構面を検出した。本文25頁。	5㎡	07S275
90	山科本願寺南殿跡	山科区音羽伊勢宿町32-46	9/20	GL-0.78mで山科本願寺期の整地層を確認。基礎掘削深度を指示する。	7㎡	07S314
91	山科本願寺南殿跡	山科区音羽西林33-2, 33-5, 33-10	5/7	顕著な遺構なし。	38㎡	06S749

鳥羽地区

番号	遺跡名	所在地	調査日	調査概要	調査面積	受付番号
92	石原城跡	南区吉祥院石原町61-1, 61-2及び301	4/19	中世に明確に遡る遺構・遺物はなし。	42㎡	07S002
93	上鳥羽遺跡	南区上鳥羽鴨田12-1, 13-1	10/1	耕作溝1条を確認。上鳥羽城東堀の痕跡確認できず。	32㎡	07S279
94	鳥羽離宮跡	伏見区竹田西内畑町19, 34	6/1, 20	GL-1.7mで鳥羽遺跡の遺構面を確認。発掘調査を指導。	48㎡	06T609
95	鳥羽離宮跡	伏見区竹田中内畑町142の一部, 143の一部, 144	7/17	GL-2.05mで砂礫の地山。湧水あり。	25㎡	07T156
96	鳥羽離宮跡・鳥羽遺跡	伏見区中島秋ノ山町100-1	12/19	GL-0.5m~1.15mで勝光明院の園池汀線を検出。本文28頁。	27㎡	07T372
97	鳥羽離宮跡	伏見区中島秋ノ山町54-1	4/26	GL-2.66mまで掘削するが、全て近代以降の盛土。	8㎡	06T516
98	鳥羽離宮跡・鳥羽遺跡	伏見区中島御所ノ内町72-1, 73-1	5/14	GL-1.4mで湿地状堆積。	11㎡	06T743
99	鳥羽離宮跡	伏見区中島宮ノ前町21, 22, 23	10/17	GL-1.1m以下、湿地状堆積。敷地の南半でさらに湿地が深くなる。	144㎡	07T074
100	下鳥羽遺跡	伏見区竹田松林町58, 59	5/16	GL-1.5mで土城1, -1.95mで古墳時代の堅穴住居2棟以上他を検出。本文31頁。	16㎡	07S007
101	下鳥羽遺跡	伏見区下鳥羽東芹川町1	6/4	GL-1.5mで遺物包含層を確認。将来の再試掘を指示。	24㎡	07S041
102	下鳥羽遺跡	伏見区下鳥羽北ノ口町75, 78	6/18	GL-0.97mで中世の耕作溝多数。	57㎡	07S085

伏見・醍醐地区

番号	遺跡名	所在地	調査日	調査概要	調査面積	受付番号
103	深草坊町遺跡・安楽行院跡	伏見区深草坊町12-7	11/19	GL-0.1m~0.7mで地山。土坑や溝などを検出したが、時期不明で密度希薄。	43㎡	07S356
104	伏見城跡	伏見区深草大亀谷万帖敷町590, 591	8/29	GL-1.5mまで盛土。遺構なし。	17㎡	07F230
105	伏見城跡	伏見区桃山福鳥太西町1-2	7/19	GL-0.3mで、伏見城期の整地層と瓦葺り、溝等を検出。発掘調査を指導。	121㎡	07F187
106	下三栖城跡	伏見区横大路下三栖辻堂町56の一部, 60の一部	12/27	下三栖城の一面を区画する深状遺構をGL-1.9m以下で確認。本文34頁。	36㎡	07S409

V 試掘調査一覧表

長岡京地区

番号	遺跡名	所在地	調査日	調査概要	調査面積	受付番号
107	左京北辺三坊十三町跡	南区久世大蔵町445	9/12	GL-1.0mで地山。耕作溝のみ。	29㎡	07NG254
108	左京三条四坊十二町・西条四坊九町跡	伏見区久我西出町13-21, 13-22, 13-27 及び 13-38 並びに市有地(未登記)(関する区域)同区久我西出町13-35及び13-36並びに市有地(未登記)	7/5	GL-1.9mで長岡京三条大路南側溝を検出。その南約2mで平行する内溝を検出した。	73㎡	07NG127
109	左京四条四坊五町・六町・七町・十町・	伏見区羽東師菱川町610-3	5/28, 29	GL-2.9m～3.1mで黄灰色粘土の地山。土壌1基, 溝2条, 柱穴1基を検出。	165㎡	07NG107

南・桂地区

番号	遺跡名	所在地	調査日	調査概要	調査面積	受付番号
110	史跡名勝嵐山	西京区嵐山中尾下町, 嵐山上海道町	12/21	3箇所(調査区を府道に設定。掘削深度内は、旧管路の掘形による擾乱。	5㎡	19N030
111	福西古墳群	西京区大枝東長町1-214	4/17	小畑川に向かって西へ傾斜する地山を確認。 本文38頁。	33㎡	07S025
112	桂徳大寺町遺跡	西京区桂徳大寺南町2(桂徳小学校)	8/9	流水による堆積を確認。	25㎡	07S201
113	中久世遺跡	南区久世中久世町4丁目33	6/7, 11/14	GL-0.78mで平安時代, -1.08mで弥生時代の遺構面を確認。設計変更を指導する。 本文46頁。	74㎡	06S761
114	大蔵前跡・中久世遺跡・下久世橋跡・下久世城跡	南区久世城町503-1, 503-2	7/23	GL-0.3m以下で, 下久世構跡に伴う溝, 柱穴, 土壌などを検出。 発掘調査を指導する。	35㎡	07S208

表4 遺物概要表

	Aランク点数 (箱数)	内容	Bランク 箱数	Cランク 箱数	出土箱数 合計
点数及び箱数	599点(10箱)	埴輪43点, 土師器92点, 須恵器345点, 黒色土器32点, 緑釉陶器13点, 灰釉陶器6点, 陶磁器32点, 瓦器2点, 瓦34点	5箱	25箱	40箱

報告書抄録

ふりがな	きょうとしなにいせきしくちろうさほうこく
書名	京都市内遺跡試掘調査報告 平成19年度
副書名	
巻次	
シリーズ名	
シリーズ番号	
編者名	馬瀬智光・巖 大輔・宇野隆志・家原圭太
編集機関	京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課
所在地	〒606-8342 京都市左京区岡崎殿勝寺町13 京都会馆内
発行機関	京都市文化市民局
所収遺跡名	〒604-8571 京都市中京区寺町通御池上る上本能寺前町488
発行年月日	西暦2008年3月31日

所収遺跡名	所在地	コード			北緯	東経	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
		市	町	村					
平安京左京三条三坊 十町跡・烏丸御池遺跡 二条殿御池城跡	京都府京都市中京区 南替町通御池上る龍池町449-1	26100	1	35度 46分 47秒	135度 0分 58秒	2007/4/11, 12	32	共同住宅	
平安京左京 四条四坊九町跡	京都府京都市中京区 柳馬場通三条下る信康町84-2	26100	1	35度 0分 29秒	135度 45分 51秒	2007/5/15	28	共同住宅	
平安京右京 九条大路跡 唐橋遺跡	京都府京都市南区 唐橋川久保町18	26100	1	34度 58分 45秒	135度 44分 11秒	2007/2/28	37	宅地造成	
本山古墳群	京都府京都市左京区 岩倉輪枝町333-3池	26100	143	35度 3分 57秒	135度 46分 5秒	2007/3/26, 27	82	保育園	
御所ノ内町遺跡	京都府京都市右京区 太秦御所ノ内町22.25-1	26100	915	35度 0分 46秒	135度 41分 57秒	2007/8/20	61	撮影所	
史跡天塚古墳	京都府京都市右京区 太秦松本町	26100	A808	35度 0分 25秒	135度 42分 43秒		0	自然崩壊	

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
平安京左京三条三坊十町跡	都城跡	平安時代			主要な遺構は現地保存
烏丸御池跡	集落跡	弥生時代～古墳時代			
二条殿御池城跡	城跡	室町時代	御所と宅地を区切る溝	土師器	
平安京左京四条四坊九町跡	都城跡	平安時代	土壇	土師器・天目茶碗・志野焼	
平安京右京九条大路跡	都城跡	平安時代	溝・集石遺構		
唐橋遺跡	集落跡	弥生時代～古墳時代			
本山古墳群	古墳	古墳時代	古墳		1基は現代の盛土
御所ノ内町遺跡	集落跡	平安時代	溝	緑釉陶器	主要な遺構は現地保存
史跡天塚古墳	古墳	古墳時代		円筒埴輪	

報告書抄録

ふりがな	きょうとしないせきしくつちょうさほうこく								
書名	京都市内遺跡試掘調査報告 平成19年度								
副書名									
巻次									
シリーズ名									
シリーズ番号									
編著者名	馬淵智光・稲 大輔・宇野隆志・家原主太								
編集機関	京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課								
所在地	〒 606- 8342 京都市左京区岡崎最勝寺町13 京都会馆内								
発行機関	京都市文化市民局								
所在地	〒 604- 8571 京都市中京区寺町通御池上る上本能寺前町488								
発行年月日	西暦 2008 年3月31日								
所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因	
		市	町						村
山科本願寺跡	京都府京都市山科区 西野広見町5-7, 5-10	26100	626	34度 59分 0秒	135度 48分 32秒	2007/9/25	33	宅地造成	
鳥羽離宮跡 鳥羽遺跡	京都府京都市伏見区 中島秋ノ山町100-1	26100	1166 1167-1	34度 57分 6秒	135度 44分 40秒	2007/12/19	27	店舗兼倉庫	
下鳥羽遺跡	京都府京都市伏見区 竹田松林町58, 59	26100	1170	34度 56分 41秒	135度 45分 3秒	2007/5/16	16	店舗	
下三栖城跡	京都府京都市伏見区横大路 下三栖辻堂町56の一部、60の 一部	26100	1185	34度 55分 41秒	135度 44分 59秒	2007/12/27	36	倉庫	
福西古墳群	京都府京都市西京区 大枝東長町1-214	26100	998	34度 58分 4秒	135度 40分 38秒	2007/4/17	33	宅地造成	
中久世遺跡	京都府京都市南区 久世中久世町4丁目33	26100	772	34度 57分 29秒	135度 42分 47秒	2007/6/7, 11/14	74	工場	
所収遺跡名	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物		特記事項	
山科本願寺跡	寺院跡	室町時代		塹				主要な遺構は現地保存	
鳥羽離宮跡	離宮跡	平安時代		池				主要な遺構は現地保存	
鳥羽遺跡	集落跡	弥生時代～古墳時代							
下鳥羽遺跡	集落跡	弥生時代～古墳時代		竪穴住居・柱穴・土塹		土師器		主要な遺構は現地保存	
下三栖城跡	城跡	室町時代		濠				主要な遺構は現地保存	
福西古墳群	古墳	古墳時代							
中久世遺跡	集落跡	弥生時代～古墳時代						主要な遺構は現地保存	

圖 版

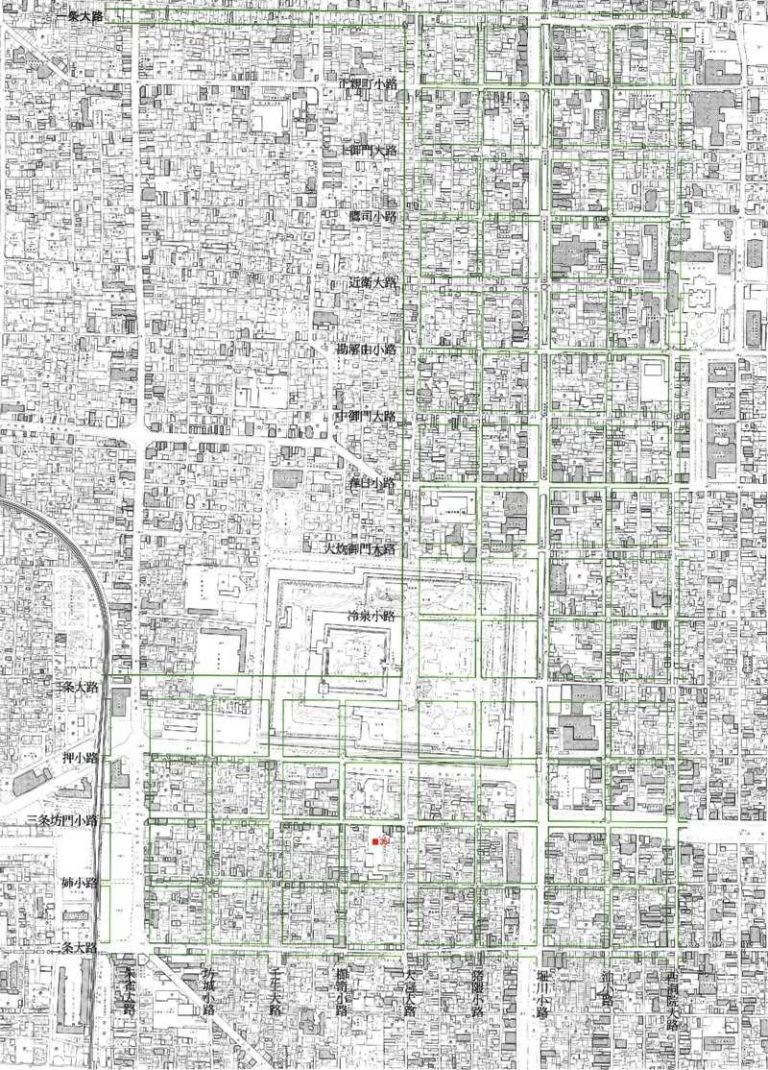
凡 例

平成19年試掘調査地点

□ 1月～3月

■ 4月～12月

----- 遺跡範囲



一条大路

上御門小路

上御門大路

鷹司小路

近衛大路

揚屋由小路

中御門大路

春日小路

大炊御門大路

冷泉小路

二条大路

押小路

二条坊門小路

藤小路

一条大路

大土太小路

苏我小路

千生大路

櫻小路

大土太小路

藤原小路

堀川小路

流小路

西園寺大路









東大路

正和門大路

上御門大路

藤原小路

近衛大路

勘解由小路

中御門大路

春日小路

大炊御門大路

冷泉小路

東大路

神小路

三条坊門小路

柳小路

三条大路

西宮橋大路

無定小路

江小路

藤原小路

大辻大路

東上町小路

再代小路

宇多小路

道祖大路

平安京右京四～六条一、二坊

園版付

一条大路

六角小路

四条坊門小路

錦小路

四条大路

緩小路

五条坊門小路

高辻小路

五条大路

樋口小路

六条坊門小路

楊梅小路

六条大路

海部大路

勢多小路

西堀川大路

西堀川小路

西入内小路

内堀川小路

西堀川大路

西坊城小路

西堀川大路



六条大路

左女牛小路

七条坊門小路

北小路

七条大路

堀小路

八条坊門小路

堀小路

八条大路

野小路

九条坊門小路

信濃小路

九条大路

西京橋路

無定小路

山小路

高瀬小路

木辻大路

重正利小路

堀内小路

宇多小路

道祖大路



六条大路

五女牛小路

七条坊門小路

北小路

七条大路

堀小路

八条坊門小路

梅小路

八条大路

針小路

九条坊門小路

信濃小路

九条大路

道州大路

蹴上小路

西馬小路

西粉小路

西大宮小路

西園小路

西園坊門小路

西園坊門小路

朱雀大路



史跡
賀茂別當神社境内

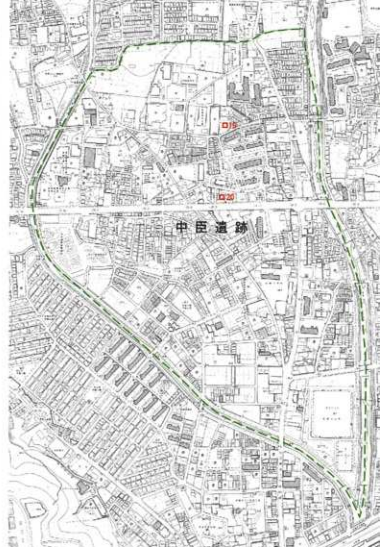
天然記念物
深泥池生物群集 図版15

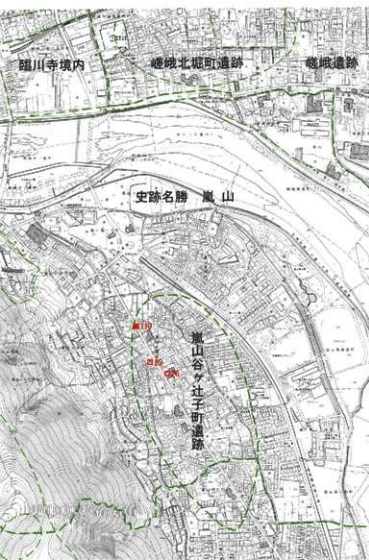
西山古墳群

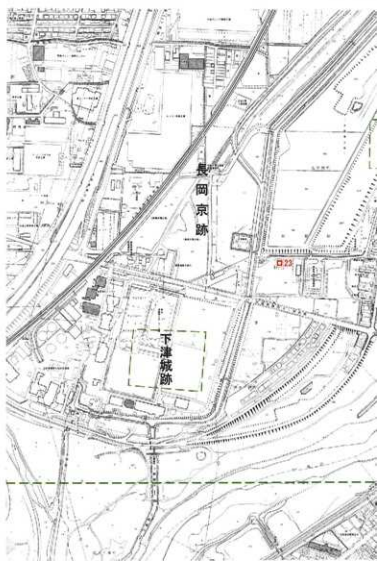
権物園北遺跡

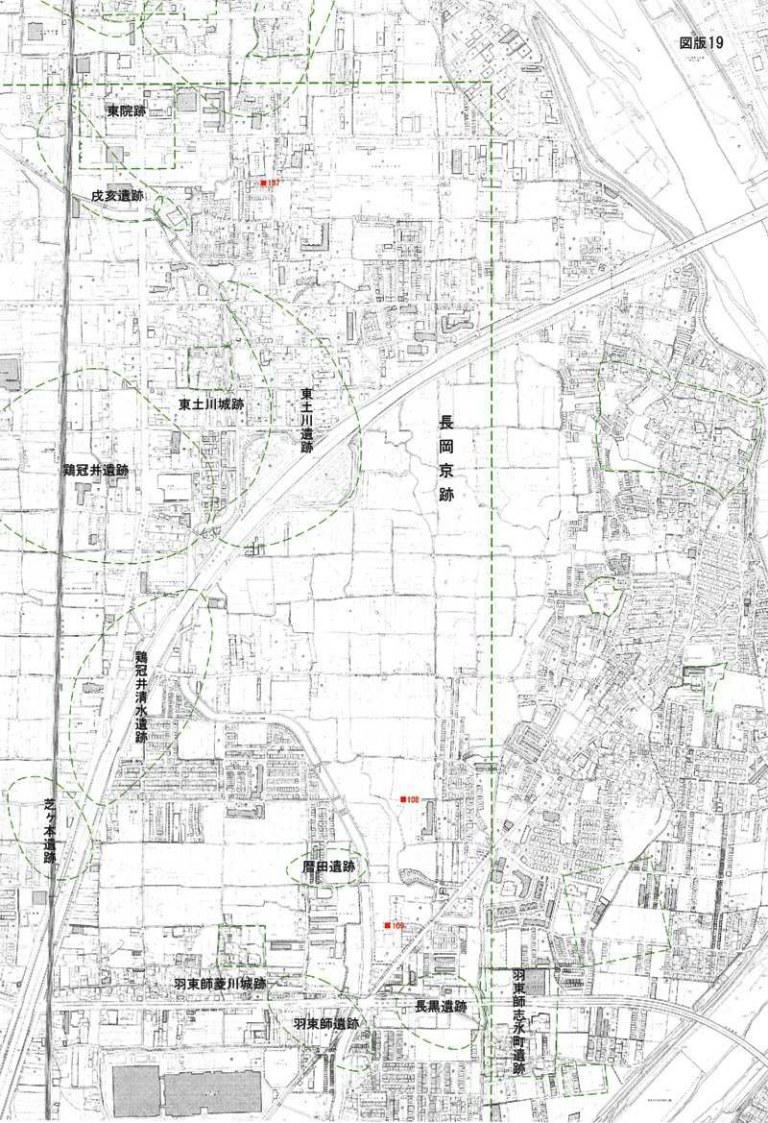
御土屋跡











東院跡

戊亥遺跡

東土川城跡

東土川遺跡

長岡京跡

鶏冠井遺跡

鶏冠井清水遺跡

芝々本遺跡

厚田遺跡

羽東師葦川城跡

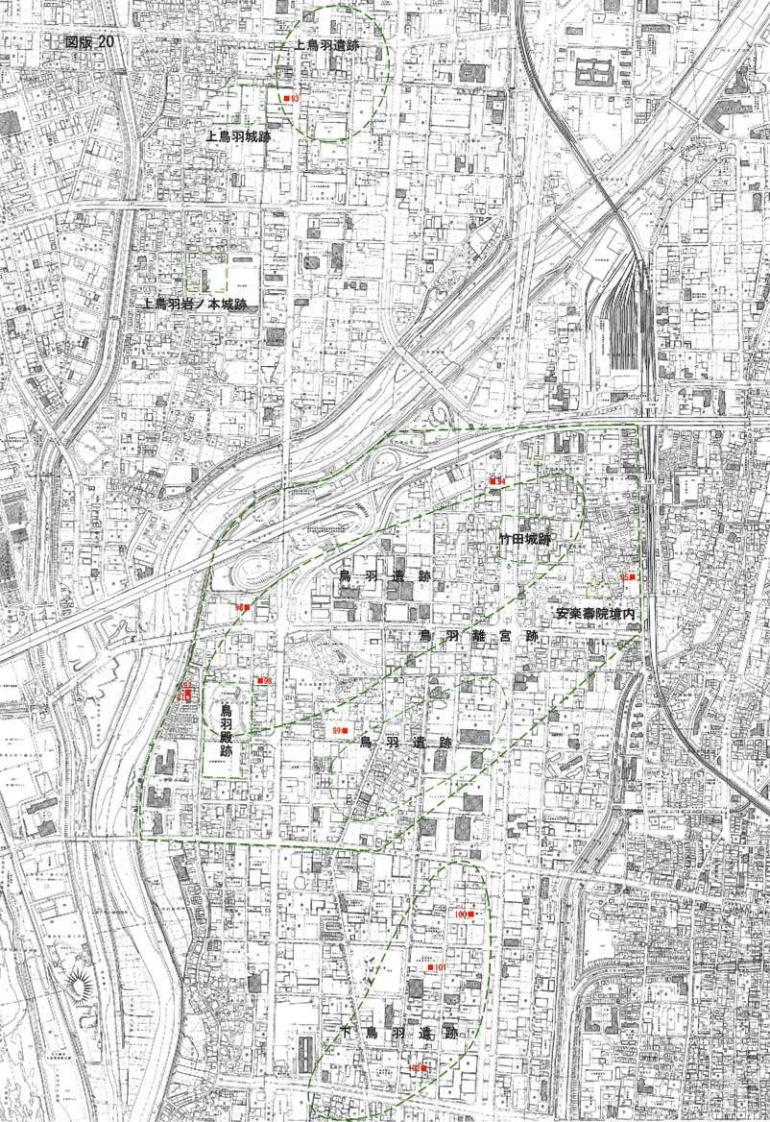
羽東師遺跡

長黒遺跡

羽東師志永町遺跡

100

101



上鳥羽遺跡

上鳥羽城跡

上鳥羽岩ノ本城跡

竹田城跡

鳥羽遺跡

鳥羽離宮跡

安楽書院境内

鳥羽殿跡

鳥羽遺跡

下鳥羽遺跡

京都市内遺跡試掘調査報告

平成19年度

発行日 2008年3月31日
京都市印刷物 第193192号

発行 京都市文化市民局

編集 京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課

住所 京都市左京区岡崎最勝寺町13
TEL.(075)761-7799

印刷 ワールドプリント TEL.(075)741-1931

